外科新書

遠西不冷吉著

乾

特別
920
1

PLENCHEN VAN GESSCHE,

KORTE

LEERSTELLINGEN

DER

ALGEMEENE OEFENENDE

HEELKUNDE.

VIERDE DRUK

TE AMSTERDAM, BIJ,

J. B. EL WE.

1814.

外科新書序

吾家素駿之一賈人也然我爲人不好家産耽醫之事繼讓於弟東游江戸當是之時和蘭之學絪縕天下人皆得而知其善蓋爲其學也格物窮理而無不溯洄其源是以供之日用一無謬誤吾駿之地未曾唱此學我幸遇此學之時不可不學也是以學之湊先生修辭譯書畧猶得之以爲事不簡不成業不專不精恐失醫道於

門
號 920
巻 1

是乎靡之中道周探羣書索治術以爲
数西醫之旨而得諸家所譯書數十部
亦或得此書於市中携歸歴觀之則
西医不拾吉所述吉雄氏所譯高論
旨深漢籍所未嘗言實益于學者
然脱其七八之卷又有字句難讀且不
可解者是故我欲質之湊先生而遇
先生之之長崎是故不成吾畧校字
句之誤其不可考者即存于舊字
以讓後好士

文政五年秋七月廿六日

花井貞純　識

突傷

外科新書

○總目録

巻之一

○凡例
創傷篇第一
創傷總論　看法
治法　○截剪及打撲創傷
挫傷創　射創傷

毒(フルギスト)創傷 噬嚙毒虫也　○神経(セェニユー)創傷
腱(ペース)創傷　動脈(スラーグアッデル)創傷
水脈(ワートルペンテン)創傷　関節(ゲウエリクト)創傷
骨(ベーン)創傷　○頭(ホーフト)創傷
顔(アーンゲシクト)創傷　頸(ハルス)創傷
胸(ボルスト)創傷　腹(ビユイキ)創傷
挫傷(ゲヅウヰキト○クチウヽンヽデン)

巻之二

潰瘍(ゲヅウエル)篇第二

潰瘍總論　單症潰瘍
膿巣潰瘍　瘻潰瘍
瘜肉様潰瘍　海綿(スポンスアクチヘ)狀潰瘍
豚白肉様潰瘍　腐壊性潰瘍
癥瘡(ヘリニユスヽイキテ)潰瘍　蟹(カニクル)瘡潰瘍
在内腐骨潰瘍「フルラウテルデズウヱール」
疥癬潰瘍　施術後潰瘍
蟲(ウヲルム)潰瘍　乾蓋潰瘍
潰瘍所在篇

所在區別　頭潰瘍
鼻孔潰瘍　耳竅潰瘍
唖管潰瘍　下顎潰瘍
咽喉潰瘍　上顎内面潰瘍
口中潰瘍　頸潰瘍
胸潰瘍　乳潰瘍
肛門潰瘍　會陰潰瘍

卷之三

腫瘍篇第三

腫瘍總論
焮痛腫瘍第一
焮痛腫瘍總論　各箇焮熱腫瘍
兼焮痛腫瘍　血斑
「ローズ」　火傷
寒因焮痛　疫腫瘍
咽喉焮痛　齒齦焮痛
耳腮焮痛　乳焮痛
睾丸焮痛　前皮焮痛

亀頭焮痛　便毒（ヘーニユスボイレン）
標疽
膿腫瘍第二
膿腫瘍總論　膿腫瘍
膿瘤腫　胸膿腫
肉部疕痒第三
肉疕痒總論　湿疕痒
乾疕痒　寒脫疽（ユーテヒユール）　熱脫疽（ヘーテヒユール）
頑固腫第四
頑固腫總論　節核腫（シヌースト）
「ケレーフト」腫　「コロップキリル」腫
「コロップ」腫　核起腫
卷之四
水腫（ワーテルヒユクト）第五
水樣腫總論　粘液腫　脹腫
鹹液腫　水腫瘍
水腫　頭水腫
脊水腫　胸水腫

腹水腫　　關節水腫
血腫第六
血腫總論　　血斑
眞動脈瘤（ウワーレボイルアッデル）　　假動脈瘤（オンウワーレボイルアッデル）
靜脈瘤　　「スペユンアートル」腫

卷之五
土様腫第七
土様腫總論　　土腫
「イーグトカルタボイル」　　舌石（ドンクステーン）昌齊按ニ「ハルマ」ニドンクテーレニ云モノハ舌形ノ石ナリトアリ

空腫第八（リユフトボイル）
空腫總論　　空腫
總身風腫　　頭風腫
空丸腫　　鼓脹
唾腫第九
唾腫總論　　唾涎腫
膽腫第十
膽腫總論　　膽囊腫
尿腫第十一（ピス）

尿腫總論　膀胱腫

乳汁腫第十二

乳汁腫總論　乳房乳汁腫

四肢乳汁腫

不眞破裂第十三

不眞破裂總論　陰囊水破裂

陰囊血破裂　陰囊風破裂

陰囊精破裂　陰囊肉破裂

陰囊腫破裂　陰囊脂肪破裂

陰囊靜脈破裂　膿水様破裂

臍血破裂　臍風破裂

臍膿破裂　臍肉破裂

臍靜脈破裂　臍脂肪破裂

体器腫第十四

体器腫總論　腹股合縫睪丸腫

卷之六

脱垂編第四

脱垂總論　直腸脱垂

膣脱垂　子宮脱垂
破裂編第五
破裂総論　合縫破裂
袋破裂　股破裂
卵圓孔破裂　臍破裂
會陰破裂　膣破裂
膊破裂　四肢破裂
胸破裂　頭脳破裂
囊疝　股疝

卵形竅疝　膣疝
陰莖疝　臍疝
腹疝　腰疝
會陰疝　胸疝
頸破裂
巻之七
巻之八
巻之九
骨病篇

関節腫纏襞（リウロシ）　関節焮痛
関節膿腫　関節「アルテリチー」𠤎腫
関節「ポダガリー」𠤎腫　関節腫脹
関節豆腫　関節「レユグット」腫
関節白腫　関節腐骨
関節豚肉腫　関節水腫
関節骨様腫
骨（ベーン）損傷総論（シウエートシユール）（ベーンブレイキ）
脳蓋（ハルセンパン）損傷　鼻骨損傷

面諸骨損傷　下顎損傷
推骨（リユクベーン ウヲルテル）損傷　胸骨（ボルストベーン）損傷
肋骨（リツブベーン）損傷　薦骨（ヘーリゲベーン）損傷
無名骨損傷　鎖骨（スラーテルベーン）損傷
肩胛骨（スコーテルロスコーテルブラド）損傷　膊骨損傷
前腕骨損傷　前手損傷
後手骨損傷　指骨（ビンゲルベーン）損傷
股骨損傷　股骨（ボート）頸損傷
膝蓋骨（キニーボツ）損傷　腓骨損傷

前跗諸骨損傷　後跗諸骨損傷

足指骨損傷

雜病篇

諸骨片碎　諸骨剥露

骨創　骨體缺損

骨腐枯　「ウインドトール」

骨痛　骨「フロースヘイト上」

骨軟脆　骨不具

骨膧

巻之十

藥劑篇十九方

總目録終

外科新書巻一

紀元一千八百年第三鏤刻

雅古弗斯不冷吉　撰著

遠西　達非度業斯爾　増補

西肥　吉雄權之助　譯

○凡例

（一）外科術トハ何ソ外患ヲ保護治療スルノ道之

○外科医トハ何ソ此術ヲ以テ百患ニ臨ミ能ク

攻治スル者ヲ称ス

○医必シモ不可不習慣之術分テ二則トス曰小則曰大則

小則

(三) 生象則　二 生理則

三 察病則　四 外薬則

五 繃縛則　六 器械則

大則

一 創傷則　二 潰瘍則

三 腫瘍則　四 解脱則

五 不具則　六 骨病則

七 手術則

餘則

一 眼目則　二 耳病則

三 歯病則　四 皮病則

五 癥瘡則　六 ゲレフテルーキ病 追考

七 産科則　八 ウール子ーノンシ病

九 外科術様ノゲレキド則

凡瘍医タル者眼目明ナルヘク齢老タルヘカラス

支不具ナルヘカラス才智アルヘク方理ヲ會得メ且羅甸(ラテン)語(ウヲルド)ノ弗郎察(フランス)語ヽ暗厄尓斯(エゲリス)語ノ上下蘭語等ニ通スンバアラザルナリ

○凡ソ外患処スヘキ者三法(デルテウエーセ)ニアリ。

一 外薬(マーテリステ)

二 備傳(テウエーデバニト)

三 器械(デルテチユーグ)

○創傷篇第一

第一章總論(アルテイセ)

凡創傷トハ鋭キ器或鈍器ヲ以テ人体固形部ヲ新ニ毀傷セラレテ肉ノ分裂メ出血(ブルージング)スル者ナリ

第一区別スレハ單症複症アリ

一 單症　特リ皮ノミ毀傷メ他部ニ及ハザル者ニシテ治療ヲ施スニカスカヒヨ他術ナシ

二 複症　皮ニ毀傷ヲ受ルノミナラス皮下ノ諸部ニ及者ニメ治療ヲ施ニカスカヒノミニテユカス此篇ニ載述スル諸他ノ法術ヲ施用シテ治スルコヲ得ザルノ症ナリ

第二創ノ難易ヲ区別スルニ。小創。大創。危創。
死創ノ四種アリ

一　小創　則少シモ殆危ナルコトナキ者ニシテ
単創ノ如キナリ

二　大創　則甚ル程ニ危殆ナラサレドモ治療ヲ
施スニ甚ダ意用サル者ニシテ即筋(スピール)。神経(セーニュー)。筋(ヘース)
根。骨(ベーン)。軟骨(カーカベーン)。水脉(ウワトルアッテル)創等ナリ

三　危創　患者已ニ危殆ニ及者ニシテ。即大動脉。
神経。腔内。内蔵等創ナリ

其二　髓中ノ創

四　死創(フルステルフ)　死(ドーデ)ニ至ル者ト死ニ至ントスル者アリ
又此創ヲ分テ三トス
其一　必死ノ者　此ハ自然ナル者モ手術モ施セドモ
死ヲ免ルコト得サル者ニシテ。又此ヲ細別スレハ五証アリ
其一ハ霊魂(セーニューアイト)ノ総身(リカームス)ニ流注スルコトヲ妨碍スル創之
此ニ関属スル者
其二　大小脳(ハルセン)ノ深創(リーフウヲント)延髄ノ創ナリ
其三　脊髄ノ創
其四　八対神経ノ幹創

其五 肋間神経ノ。及横膈膜神経ノ創ナリ
其二 棄置スルトキハ死スヘキ者ナリ。此ハ棄置スル
中ハ死手術ヲ用ル時ハ治ス之。
其三 傍症ニテ死ヘキ者。此ハ患者及医ノ過。或
六ノ逆理ヨリメ死ヲ招者ナリ

○必死ノ証

其二 血(ブルード)ノ心(ハルス)ヨリ出入スルコヲ障碍スル創ナリ
此属スル者ハ一心室及耳及心胞(パルドブリース)ノ創。二頭胸腹
ノ大動脈静脈ノ創ニテ手術ノ及ザルモノ等之

其三 呼吸(アーデムハーレン)ヲ全ク妨障スル創ナリ。此ニ属スル者ハ
一ハ気管(ゴーベルペープ)ヲ全ク切断シタル創
二ハ気管(アーデムカット)ノ枝ノ切断
三ハ胸内ノ両腔或偏腔及縦膈膜ノ創
四ハ肺(ロング)ノ大創
五ハ横膈膜ノ大創等ナリ。
其四 乳糜(ゲール)ノ製造ヲ障碍スル創。此ニ属スル者ハ
一ハ食道(マーゾダルム)ノ大創ニメ手術ノ及サル者
二ハ胃(マーク)府及大小腸ノ大創ニメ縫合スルコ不能

又手術ヲ以テ肛ヲ造製スルヿモ能ザル処アル者
三ハ乳糜囊及ヒ管及乳官ノ創
四ハ胆及胆管及膵管ノ創也
其五 其一個ノ部分ニ血液ノ溢入スルヲ閉止スルヿ
モ不能 又既ニ溢入スル血液ヲ出スヿモ能サル
創ナリ此ニ属スル者ハ
一ハ脳蓋ノ瓶及脊推ノ狭キ処。或脳ノ空隙ノ
処。或円エール様ノ肉。或脳ノ溝渠。或小脳ノ障
膈ノ上下ニ血液ノ溢スル者

二ハ胸内。及心胞。及縦膈膜（ミッテルスコート）ノ後ノ空隙ニ血液ノ
溢入スル者。三腹或ベツケンノ空隙ノ処。或腹膜（ヘニスサツク）
ノ後。方腰ニ当ル処ニ血液ノ溢入スル者
四ハ輸尿管。胆管。膵管。乳管。等ニ血液ノ溢入スル
ヲ閉止スルヿ不能者等ナリ

○第二章創傷看法

凡テ大創ハ容易ク形状ヲ看テ知ルヿヲ得シ
○凡テ小突創ハ挿（ザクリ）具或傍症ニテ察知スルヿヲ
得ル者ナリ

○第三章創傷治法

凡創傷ノ治法ニ二方アリ愈着ト膿潰トナリ然リト雖モ此二方ハ実ニ自然ノ力ニテ只其治ヲ速ニスルノミナリ

○夫創傷ハ單複及觸物ノ鋭鈍ニ随テ愈着膿潰ノ治法ヲ撰ヒ処スヘシ

○第四章切剪刄折撲創傷

此創傷ハ若シ新ニシテ而創内ニ異物ノ入ラザル時速ニ創唇ヲ聚合シテ愈着セシムヘシ

此治療ヲ処スルニ四法アリ即

一 カスカヒヲ以テスヘシ。此甚タ深カラザル処ノ諸創傷ニ用ユヘシ

二 合縫術ヲ施用スヘシ。此ハ甚ダ深ク横断シタル処ノ諸創傷ニ用ヘシ

三 聚合縛術ヲ施処スヘシ。此ハ深ク縦断シタル処ノ諸創傷ニ用ヘシ

四 紋出縛帯ヲ施加スヘシ。此ハ凡テ突大創ニ用ルナリ

此諸法ハ予手術篇ニ載論セリ

○第五章突傷

此突創モ亦単複ニ分別ス

其単症トハ只皮ノミ毀傷スル者之

其複症トハ皮ノ毀傷ヲ受ルノミナラス。他部ニモ及フ者ナリ

其単症ノ者ハ形象ヲ見テモ知レ。又探索メモ知レ又傷症ニテモ察知スルヿ能ワヌナリ

其複症ノ者ヲ知ニハ

一 探索ヲ以シ

二 水鏡術ヲ以テシ

三 創口ヨリ漏滴スル液ヲ以テシ

四 其症ヨリ続キ起ル傷症ヲ以シ

五 觸ルル物ノ寸度ト創傷ノ寸度ヲ比較ヲ以テスルナリ

此治療ハ単症者ハ微温湯ニテ水銃ヲ施シ創内ヲ清刷メ而。何ニモ附貼セスニ直ニ枕木綿ヲ上ニ入ル程大ニメ幾箇モ重積メ其ハ

打撲ナリ
挫[illegible]ナリ

上ニ絞出縛帯ヲ施加スヘシ
○創底ニ膿腫ヲ発生シタル創口ハ開割シ又創底ヲ開割スヘシ
○其突創ノ神経或ハ血管骨内臓及ヒ複症ノ者ハ速ニ創口ヲ剪刀開スヘシ此緊要ノ創ヲ患処ヘ施セ易カラシメンカ為ナリ

○第六章 挫傷創

此症ハ打撲。落墜。衝觸。投石。飛木ヲ以テ発起スル者ナリ
此症ハ愈着セスニ潰膿セシメテ愈ヘキナリ
此治療ニ於テ創ヲ膿潰セシメルニハ緩和「バルサム」様ノ軟膏ヲ施スヘシ。即チ「ユンクエンチユムデキステイヒヨム」或「バルサムアルカーイ」明礬水ニ漬シタル乾撒糸或「ヱキスタラクチユム サチユルニー」ヲ以テ造膚スヘシ○此ニ由テ挫傷ニ緊要ナル者ハ

一 膿熟セシムルコト
二 上肉セシムルコト
三 造膚セシムルコト等ナリ

○第七章 射創

此射創ヲ一個ノ部分ニ全ク通徹シタル者ト全ク通徹セザル者トニ分別スルナリ

○其全ク通徹スル者ノ創ハ凡丸ノ入口ハ出口ヨリ狭窄ニシテ其皮ヲ押込タル様ニ成テ其周囲暈紅色ヲ帯タル赤色ヲ発スルナリ。其出口ハ必シモ著ク高起スル者ナリ

○此創ハ両症共ニ出血スルヿ少ク劇シキ焮痛有テ常ニ膿潰スルヿ甚タ遅キ者ナリ

此治療ニカニヤウナル者ハ焮痛ヲ減シ膿潰ヲ催進スルヿナリ即其ノ方術

一　創口ヲ開割スルヿ

二　緩和ノ敷薬即軟膏及蒸薬ヲ施用スヘシ

三　数次ノ刺絡及清涼ナル内薬ヲ施処スヘシ

若シ焮痛モ治愈シ膿モ十分ニ流出シタラハ全創水ヲ銃射メ愈着セシムヘシ

○其全ク貫徹セザル者ハ必ス創内ニ銃丸ノ留在スル者ナリ

○若シ其ノ銃丸ヲ除キ去タル後ハ全ク貫徹シタルモノ。治法ニコトナルヿナシ

○其ノ銃丸ヲ除キ去ルニハ先ツ創口ヲ十分ニ開割シテ而后

一ニ指ヲ以シ

二ニ「ダンシグクキヌキ」ノ類ヲ以シ

三　七子状器ヲ以シ

四　創ノ底ユカヨリ穿開スヘシ。此ハ銃丸ノ深ク入ツ口ヨリ底ユカ近キ者ニ施シ

五　螺施丸鑓ヲ以テス此ハ丸ノ骨中ニ堅ク穿挿シタル者ニ施スヘシ

○或銃丸ノ創口ヨリ甚深遠穿挿シテ数年ノ間探索スル𪜈知レズ又切リ出スヿモ能ハズ恙患モナキ者アリ此ハ其后自然ナル者出除スル者之

○第八章　毒創

平常ノ毒創ハ病犬及毒蛇咬傷ヲ云也。

其病犬咬ノ徴ハ患者屢気絶ヲ発シ時日経ノ後恐水病ニ変移スルヿ。其症ハ患者水ヲ飲ム

ヿモ能ハズ又流動ノ諸物ヲ見ルヿモ能ハザル者之

此治療ニ緊要ナル法方即チ

一 患処ノ上部ヲ緊縛スルヿ

二 患処ニ刀刺(キリツメ)或烙鉄(ブランドエイセル)ヲ用ヿ

三 患処ニ吸硝子(ベントウサ)ヲ施テ吸收スルヿ

四 患処ニ塩酸底野迦(ソウトアセイン)ノ三薬ヲ混交シ洗灌スルヿ

五 患処ヲ十五日ノ間水銀軟膏ニテ摩貼スルヿ

六「シンフレイキス」膏ニ赤汞ヲ加タル者ヲ患処敷貼メ膿汁ヲ流滴セシムベシ。必少クトモ六七月ノ間ハ不絶膿熟セシメテ創口ヲ愈着セシムルヿ勿レ

七「ゴムクイッキ」阿片樟脳麝香等ヲ合メ内服セシムベシ。又「ビルトチヨクールタランキ」及「ゲルデルラントヽ」ノ王命ニテ世ニ公ニシタル薬剤ヲ用ベシ

其毒蛇咬ハ種々ノ傍症ヲ発起ス。即チ気絶、黄疸(ケールシユクト)。昏睡病(スラアプシーキテ)、身体倦重。渇。心動悸。煩悶。患処疼痛及嗽痛或空腫ヲ発ス

凡毒蛇咬傷ニ緊要ナル法方即

一 患処ノ上部ヲ緊縛スルヿ

二 烙鉄ヲ施用ルヿ

三 刀刺スルヿ

四 吸硝子ヲ施加スルヿ

五 底野迦（テリアカ）等ヲ以テ洗濯スルヿ

六 蛇頭（スランガステーン）ヲ患処ニ附貼スルヿ

七 患処ヲ切断スルヿ

然𪜈

一 此毒ハ血中ニ混シ易シ其故ハ毒傷ヲ受ルトキハ忽チ内部ノ傍症ヲ発起スルニテ知ルヘシ

二 毒蛇ノ各々ノ性ニ随テ種々ノ傍症ヲ発スルナリ

三 其各種ノ毒ニ随テ各解毒ノ方アルニ由テ種々ノ内薬ヲ以テ治療ヲスルヿ緊要ナリ

○其ハ「イタヤ」ノ蝮蛇咬ハ「コムクイツキ」ニ竜胆（ケンチアナ）根ヲ加テ飲服セシムルヨリ他方ナキナリ

○其「フラニス」ノ蝮蛇咬ハ内部ヨリ蝮蛇塩ヲ与ヘ

外部ヨリノ「ホルトカル」ト揮発塩トニテ造製シタル軟膏ヲ敷貼スベシ
○其「アニゲリヤ」ノ蝮蛇咬（蝍蛇ナリ）黒ハ外部ヨリ胆八（オーレーフオーリー）油ヲ撮塗スルナリ
○其「ラーテル」ノ蝮蛇咬ハ「セ子ガー」（草ノ名）ヲ宜トスルナリ
○其「ナーヤ」蛇ノ咬傷ニハ「ヲヒヨリサー」ヲ宜トスルナリ○イルレーレセ蝮蛇咬ハテリアカヲ以テ内外ヨリ用ルヿヲ林若言久
○其「スウツレ」ノ蝮蛇咬ハ劇症トスルナリ其故

古ヨリ今ニ至ルマテ其解毒方ヲ発明セザレハナリ。然ドモ或「ヱツセン」木ノ新葉ヲ宜シトスル者アルナリ
○平常ノ蛇及蝮蛇ニハ毒アルヿナシ因テ其咬傷ヲ被トモ。格別ノ患害アルヿナキナリ
○其踊躍ヲ好ムヿヲ発セル処ノ「イタリヤ」ノ蜘蛛咬モ赤患害アルヿナキナリ
○其「ウヱスホ」ノ馬蝿咬ハ直ニ患処ヲ冷水ニテ洗ヨリ。他方ナキナリ蛇蟲ノ刺毒ニハ其蛇蟲ノ

油ヲ敷貼シテ治スナリ

○第九章 神経創

此創ハ全ク切タル者ト切ザル者トニ分別スルナリ

○其全切ザル創ハ種々危難ノ傍症ヲ発起スルナリ。即疼痛或焮痛或攣急或口眼喎斜或角弓反張或痺ヲ発シ死ニイタル者ナリ。此症ヲ除キ去ルニハ

一 数次ノ刺絡

二 緩和ノ糊剤

三 阿片ト乙切草ノ油トヲ以テ製スル膏剤

四 阿片水銀。解熱皮。樟脳ヲ合タルヲ内服セシムベシ。若此法術ニテ攣急不治ル時ハ即

五 傷創ヲ受ル神経ヲ全ク切断スベシ

若此術ニテモ緊急尚治セサル時ハ。其部分ヲ全ク切断除去スルヨリ外法術ナキナリ

○凡創傷アル神経ノ焮痛スル者ニハ印度ヨリ船来スル「バルサム」ヲ敷貼スル時ハ其害アル者ナリ

○其全ク切タル者ハ終ニ治セザル処ノ麻痺及ヒ不

知覚ヲ発起スルヨリ、他ノ傍症ヲ発起スルヿナキ者ナリ

○第十章腱創 筋根也

此創傷モ神経ノ創ノ如ク全ク切タル者ハ全ク切サル者ト二分別スルナリ

○其全ク切サル創ハ創口直ニ傍症ヲ起発スルヿ無レ然レモ、両三日ヲ経テ後患処ニ疼痛及焮痛ヲ起発スル者也

○凡此創傷ニ添テヲル処ノ焮痛ヨリ起発スルナリ

或又膿カ腱莢内ニ自然ト通路ヲ為レテ而其処疼痛、焮痛膿潰ヲ発起スルナリ如此ナル時ハ其ハ腱様ノ蔓延メヲル処ニ自ラ膿カ溢流メ其ハ下ニアル所ノ部分ヲ妨害スル程ニ推ス者ナリ、此ヨリ腱及腱様ノ蔓延スル処ノ突創ハ常ニ其創口ヲ割開スルヿ専務トスルナリ

○其全ク切タル創ハ、其部分ヲ運動スルヿ能ザル患ヲ発起スルナリ

此治療ハ其切レ离タル腱ヲ愈着令ルヿ緊要ノ

方術トス即

一 其切タル部分ノ位置ヲ適宜ニ附合スヘシ

二 其部ニ適スル繃縛ヲ施用スヘシ

三 「バルサム」様愈薬ヲ貼スヘシ

其ノ「アシレス」人名ノ腱ノ破裂シタルニハ「モンソー」人名「モイル」同「ペテイー」同傳帶(バンド)術ヲ宜トスルナリ

○凡テ膏剤ハ「ヱシグヱニトテキステイセヨム」魚然此見タル腱創ニハ敷貼スルヿ勿レ。其故ハ腐貼セシメ且ツ黒色(ズワールキリール)ニ変移セシムルノ患害ヲ発起スレハ以ナリ

○此症ニ甚タ佳ナル者ハ「カンフルスレイム」乳香(マキストリム)等ノ

○第十一章 動脈創

凡動脈ノ創傷ヲ受ルヿヲ分別スレハ全ク切レザル者ト全切者トヘ外膜ノミ創ツク者トノ三症アリ

此創微ハ清浄ナル赤色ノ血ノ弓形ニ射出スル所ノ其創口ノ上部ヲ緊縛スル片ハ閉止スル者ニ

○其ノ全ク切ザル創ノ出血ハ其全ク切タルモノノ出血ヨリハ甚強メ久ク続キ出テ則閉止シ難キモノノ

○其ハ外膜而已ノ創ハ出血ハセザル𪜈時日経ノ后ニ真
動脉破裂ヲ発起スル者ナリ
○此創ニ関系スル出血ヲ閉止スル方術ハ
一 収斂剤ヲ以テス即蒸升シタル焼酒テレメンシ精「デ心」
ノ止血水「ティデン」ノ止血水丹礬精明礬丹礬
乾撒系等ナリ
二 押鎮剤ヲ以テス即上ホト大ニシテ幾枚モ重子
タル枕木綿術「コーケンシスワーム」或海綿或咬咀シ
タル紙或蠟ヲ押シ込ミ或小キ「トルニケット」ヲ用
ル等ナリ
三 脉管ヲ支持スルコトヲ以テス
四 烙鉄ヲ施スコト
五 創傷ヲ受タル動脉ヲ切断スルコト
六 其脉管ヲ指ヲ以テモムコト
第一方ト六ノ方トハ細脉創ヨリ他ニ施シテハ功
ナキモノナリ
第二ノ術ハ創ヲ受タル脉管カ骨ノ近傍ニ有
ルカ或又其脉管ノ下部ヨリ支持スル者有𪜈ハ

施用スベキナリ

第四ノ法ハ只其創口後ニ膿熟スルトキハ瘡症肉脱メ再出血スル者也。此ニ由テ其部分ノ宜キナラハ。第三之法ニ随ヒ。其ハ血管ヲ支持メ閉止スル丁最良ノ術トスルナリ

若シ動脉創押壓メ閉止スル丁ヲ得ハ全愈スルノ間傅帯ヲ解丁勿レ何者凡全愈ル迄十五日ヲ経ル也。然トキハ又前法ノ如ク傅帯ヲ施用メ十五日ヲ経サハ全治セザル也

静脉創ノ出血ハ甚色黒赤ニシテ動脉出血ノ如クニ弓形ニ飛出セス。且其ハ創ノ前部ヲ緊縛スルトキハ立ニ閉止メ而假令ヒ傅帯ヲ速ニ解雖モ再ヒ出血スル丁無ナリ。何者其ハ創口ハ甚速ニ愈着スレハナリ

第十二章水脉創

此創ノ微候ハ稀清ナル水様ノ液ヲ不断創口ヨリ滴出スル者ナリ

此治療ノ方法ハ即

一　押壓術ヲ以テシ
二　明礬（アリユイン）ヲ以テシ
三　「テーデン」金創水ヲ以シ
四　焼酒ニ丹礬（ヒテリヲール）ヲ烊化シタル者ヲ以ス
時トシテハ此創内ニ海綿（スホンス）狀（アンシキヘ）ノ肉ヲ生シテ其内ヨリ不断水様ノ液ヲ泄漏スル也
此症ハ丹礬末ヲ撒掛ル片ハ容易ク治スル者也

第十三章　関節創

此創ハ通徹シタル者ト、通徹セサル者トニ分別ス
其通徹シタル創ハ試押具ヲ入レハ関節液カ泄出シ又見テモ知ルナリ
其通徹シタル創モセサル創モ常ニ焮痛ヲ発ル者ナリ
此ニ由テ初発ニ施用スル法術ハ、数度ノ刺絡、及分解シ緩和スル薬、并ニ内服ニ清涼剤ヲ與ヘキ者ノ也
其焮痛除キ去タルハ即チ創口ニ「バルサム」様ノ薬ヲ施シ備傳スヘシ

其ハ破裂ノ通徹セサル創ハ甚危篤ニシテ間死痺口噤シ及死ニ至ル者ナリ

第十四章骨創

若シ創傷ニテ諸膜剥脱シ骨裸露シ或毀傷スル片ハ乳香精気ヲ貼メヨク掩覆スヘシ其故ハ風気膿及脂様ノ華ヲ骨ニ附ニ丁ヲ恐テ防禦スル者ナリ

第十五章頭創

此創ハ通徹シタル者ト通徹セザル者トニ分別スルナリ

其通徹セザル症ノ頭蓋ニ及アリ又及ザルモ有

其通徹セザル症ニ單ノ者アリ又脳内ニ液ノ溢入スル者アリ又脳内ニ創ツクノ者アリ又脳髄質ノ振蕩スル者有也

其不及脳蓋單症ノ外創ハ他部ノ治方ト異ナルコトナシ

其脳蓋ノ創傷ハ凡五鋭創ト十七鈍創ニ分別ス

其五鋭創ニ属スル症

第一上而已ニアル創。此ハ脳蓋ノ外ノ肌而已有モノヲ云

第二浮キ創。此ハ脳蓋ノ机ノ障隔ノ処ニ至ル迄通徹メヲル者ヲ云ナリ

第三切通リヲル創。此ハ脳蓋ノ両断メ离開スル者ヲ云

第四脳蓋中ニ斜ニ通徹シタル創之

第五断离シタル創是ハ外ノ机ノ部分カキレ离レヲル者或内ノ机ノ一部分モ共キレ离ヲル者ヲ云

此五鋭創ハ凡容易ク是見テ知ル者ナリ○若シ此創ニ脳ノ創或脳髄質ノ振盪或脳中ニ血溢入スル者等ノ諸患ナキ時ハ格別ノ傍症ヲ発起スルヿナシ。而此創ノ嫩痛治シタレハ乳香精ヲ附貼メ愈着セシム

十七鈍創属スル者即

第一脳蓋ノ裸露スル創。此創ニ内外ノ両症アリ即外症ノ創ハ外膜ノ脳蓋ヨリ剥脱スル者ナリ内症ノ創ハ硬脳膜ノ脳蓋ヨリ剥离スル者之

第二毛條ノ如キ細キ響音破。此ノ脳蓋ノ処ニ在テ著ク見サル細小ノ創ナリ

第三脳蓋ノ外ノ処ノ著ク見(不)程響破レタル者之

第四創痕ノ离開スル創。此ハ脳蓋ノ厚サ程通徹スル者

第五逆ノ破裂。此ハ繝物ヲ受タル処ヨリ他部ノ破裂スル創ナリ

第六隠伏ノ破裂。此ハ外ノ机ノ机ニ創傷ナクメ只内ノ机ノ破裂スル創ナリ

第七片砕。此ハ外ノ机或又内ノ机ノ砕屑状ニナリタル創ナリ

第八「ペヨニブロツヒ」(骨ノ砕片)此ハ脳蓋ノ一片全ク离落メヲル創ナリ

第九破裂。此ハ脳蓋ノ破裂ノ全ク通徹メ离開スル創ナリ

第十破裂セスニ脳蓋ノ内ニ壓凹シタル者此ハ小児而已ニ有者ナリ

第十一脳蓋ノ裏面ノ破裂メ其上面ノ壓凹シ

タル者。此ハ大人ニアルモノナリ
第十二「フルウエルヒシフレ」。此脳蓋ノ裏面ノ損傷シ
タル者ノ高起セル創ナリ
第十三互ニ重リタル者。此ハ損傷シタル骨カ他
ノ損傷シタル骨ノ上ニ重ナル創ナリ
第十四合縫ノ离開スル者此ハ両骨ノ合縫ノ分离
開离スル者也
第十五挫傷。此ハ脳蓋ノ机ニ破裂ナキ者或机ノ
障隔ノミ創傷ヲ受タル者也

第十六実体ノ失亡スル者。此ハ脳蓋ノ一片カ全ク
除去スル者ナリ
第十七腐骨。此ハ先ニ患タル脳蓋ノ創傷ヨ
リ續テ発起スルモノナリ
其外部ニ大創アル脳蓋ノ創傷ハ容易ク見テモ
知レ。或指探ヲ以テ知ルナリ夫ニ反シ其ハ内
部ニ創ナクシテ脳蓋ノミニアル創傷ハ。甚知レ难キ
者ニ唯其傍起ノ症候ノミニテ診察スルコヲ
得ルナリ其ハ傍症内外ニ分別スルナリ

其外部ノ傍症ハ自重メ名残（持久遺瘍）ノ腫、焮痛及血ノ
患処ニ溢入メ而メ夫カ平常ノ烊解スル剤ニテ分散
セズ七日経テ后熱病（コールツ）様（アシスヘ）ノ悪寒ヲ発シ膿ヲ
醸熟メ脳蓋膜剥脱セシムル者ナリ此諸傍症
アル時ハ縦外面ニ損傷ナルト雖𪜈脳蓋ニ創傷
アルヿヲ識得ナリ
其内部ノ傍症ハ吐、胆汁、衄血、口、耳、出血眩暈
昏睡、健忘、麻痺、攣急（カランフチレツキンシストイフチレツキンク）搐搦、眼焮痛等ヲ発シ
五神用ヲ失ヒ及遂ニ熱病様ノ症ヲ起発スル之

凡テ此諸傍症ハ
一 脳ノ振盪
二 脳中ニ溢入スル血液
三 脳ノ焮痛
四 脳ノ膿潰等ナリ
脳ノ振盪ハ卒然トメ五神用ヲ失ヒ鼻口耳ヨ
リ出血シ然レ𪜈数度刺絡スル時ハ一昼夜或ハ三
昼夜ノ内ニ傍症全快スルナリ
血液溢入スル者モ其傷創小ナル時ハ速ニ傍症

起発スルヿナシ然レドモ棄置スルトキハ十七日ヲ経テ
起発スルナリ
其甚溢入スル血液ハ連ニ傍症ヲ発シ其傍症
漸々ト増加メ不止者ナリ
其ハ脳ノ焮痛ハ創ヲ受ル後両三日ヲ経テ発
起シ而此焮痛「コールツ」渇身熱舌乾燥目赤色
健忘等ノ諸症ヲ起シソレヨリメ脳ノ膿潰死
痺及ヒ遂ニ死ニ至ルナリ
凡テ脳蓋ノ諸創ハ只傷創ノミ在ルヿナク必

脳ノ振盪焮痛膿潰血液溢入ノ四症傍起ス
ルモノナリ此ニ由テ脳蓋ノ創傷ノ治術ヲ定
スルヿナリ
凡テ内部ノ傍症ナキ単症ノ頭創ハ数度
ノ刺絡灌腸分解スル薬剤等ヲ施用メ後創
傷有ル骨ヲ療ヘシ
若外面ニ創傷ナクメ毀傷スル骨隠伏メ見ヘ
ザルトキハ其患処ヲ開割メ骨ヲ裸脱スヘシ
是緊要ノ薬剤ヲ敷貼センカ為ナリ

若シ脳蓋ノ創傷及脳ノ振盪ヲ兼発スル（複症トス）ヿヨリ
意ヲ注テ療スル時ハ其ノ傍症猶速ニ治スル者也
若シ脳蓋ノ創傷ニ血液溢入スル症アル時ハ。速ニ
「ハンホール」ヲ処スルヿヲ診定スヘシ
其焮痛ハ数次ノ刺絡及清涼ナル飲物及清涼
ナル内薬ヲ与ルヨリ、他法ナレトスルナリ
其膿潰シタル者ハ「テレバアヒ」ヲ施用スヘシ然レ𪜈
此症ニ於テハ速ニ施スヿ勿レ。能ク膿熟シテ而後
施処スヘキモノナリ

前条ニ記載スル諸徴候及諸治方ニ就テ脳蓋
ノ創傷ノ各症ニ随テ診定処剤スルヿヲ得ヘキ
モノナリ。且又下条ニ一個ゝノ療法ヲ説解
スルナリ
第一脳蓋ノ裸露スル創。此創ノ外皮ニ破裂
アル者ハ知リ易ク。又治スルヿモ易キ者也若
シ外皮ニ當テ創傷ナキ時ハ外発ノ傍症ニテ知
ルヽヿヲ得ルナリ而シテ此治術ハ内部ヲ開割シ
乳香精及散ヲ附貼シテ覆ヒ置クヘシ。尼テ外

亘ニ損傷ナキ脳蓋ノ創ハ常ニ血液ノ脳中ニ溢入スル者ニ乄即其徴候ニテ知ルヘシ而此症ニハ「テレパアビ」ヲ施用スヘキナリ

第二毛條ノ如キ細キ響音破。此ハ其ハ裸露シタル脳蓋ニ墨ヲ塗リ而乄拭去ル時ハ顕然ト乄合縫ト裂ケタルトヲ認メ得ル者ナリ若シ此症ニ脳中ニ血液溢入セサル時ハガスカビヲ以テ治スヘシ若シ血液ノ溢入スル時ハ必ス「テレパアビ」ヲ施処スヘキ也

第三着ク見ルヘキ響音破。此治療ハ細口ノ響音破ノ治療ト治方異ナルヿ無也

第四脳蓋骨ノ全ク離開スル創。此ハ常ニ血液ノ溢入セザルヿナシ。故ニ必ス「テレバアビ」ヲ施用スヘシ緊要ナリ

第五逆ノ破裂。此ハ着ク見ルヿ甚難シ。只ハ其識得スルノ明徴ハ一其觸物ヲ受ルヨリ。他ノ部分ニ於テ外皮疼ニ痛シ赤色ヲ帯ル者ニ縦ヒ昏睡病ヲ発レ或五司官能ヲ失スルト雖トモ患者自ラ手ヲ患処ニ随ヒ行ワントスル者ナリ

其緊キ物ヲ齩シ或裂処ニ痛ミアリ或轆鳴スル等ノ徴ハ疑シキモノヽ其幸ニ毀傷タル処部ヲ識得セハ速ニ「テレパアニ」ヲ施用スヘキヿナリ

第六ハ脳蓋内部ノ破裂ハ此ハ外部ノ「テーゲンスプレート」ニ比スレハ最モ識得スルヿ難シ然圧此症ニハ速ニ瘀ノ脳中ニ溢入スルノ徴見ハルヽナリ故ニ必「テレパアニ」ヲ施スヿ緊要ナリ

第七外部ノ片砕ハ此創傷有トキハ容易ク知ルナリ先其屑片ヲ除去テ而メ後其裸脱セル骨ニハ上章ニ記載スル法方ヲ以テ療スルヘキヽ

第八内部ノ砕屑ハ此ハ唯内発ノ傍症ニテ知ルナリ是其屑砕及脳中ニ濫入スル血瘀ヲ除去ニ為ニ「テレパアニ」ヲ施用スルヿ緊要ナリ

第九外皮ニ創傷アル脳蓋ノ破裂ハ容易ク知ルヿヲ得ルナリ若シ損傷スル骨カ互ニ离開スルトキハ脳中ニ溢溜スル血容易ク出ル者故ニ「テレパアニ」ヲ施用スルニ及ハサルナリ此ニ因テ曽破ノミ

ノ者ハ毀傷ノ者ニ比レハ殊ニ危殆ナル之即其
脳中ニ溢入スル血液ヲ除去スレハ其骨ニ乳香精
ヲ塗貼スヘキナリ
第十破裂セスニ脳蓋ノ内ニ壓凹スル者。此ハ小児
ノ脳蓋ノ未タ柔脆ナル内ニ発スル症ニメ。多ク
傍症ヲ発セス故ニ一向沿術ヲ施サスト雖𪜈日
月ノ経ニ随テ漸々ト復治スル者ナリ然𪜈
間悪キ傍症発起スルヿ有也。然時ハ其壓凹
スル脳蓋ヲ引挙整復スヘシ。即諸医ハ「ヘシト
ーザ」。強キカスカヒ膏子テレテレパアンヲ可ナリトス
第十一毀傷スル脳蓋ノ壓凹ハ必ス「テレパアン」ヲ
施ス緊要ナリ。此溢入スル血ヲ決出シ且ツ擯ヲ
入テ其凹陥スル骨ヲ排出シ整復セシカ為ナリ
若シ擯ヲ挿入スルヿヲ得サル時ハ必ス。其凹陥
スル部分ニ幾処モ「テレパアン」穿貫シテ而メ
擯ヲ挿入スヘシ
第十二脳蓋骨ノ凸推スル者。此モ亦「テレパアン」
施用メ其脳中ニ溢入スル血ヲ決出スルヿ緊

要シ而後其凸推スル骨ヲ押壓シ整治スベキモノナリ

第十三　互ニ重リタル者ハ此ハ先始メ「テレパアニ」ヲ穿貫シ而後損ヲ用テ壓凹スル骨ヲ上ニ控動シ且ツ凸推セル骨ヲ下ニ鎮壓メ整復スベキ者ナリ若此術ヲ施ヿヲ得ザル片ハ又「テレパアニ」ヲ幾個モ貫穿シテ整治令ムベシ

第十四合縫ノ開闊スル者ハ此ニ常ニ脳中ニ血ノ溢入スル者ナリ而メ此症ハ「テレパアニ」ニテ穿貫メ其ハ脳中ニ溢入スル血ヲ決出シ且ツ損ヲ挿入シ開闊スル骨ヲ整治復故スルヿ緊要ナリ若シ棄置メ此術ヲ施用セザル片ハ遂ニ死スルナリ

第十五脳中ニ血ノ溢入セザル外部ノ机障隔ノ挫傷ハ其患処ヲ開割メ乳香精ヲ附貼シ擔覆スベシ若シ此術ヲ怠ル片ハ腐骨ヲ発起スルモノナリ

第十六骨ノ実体ノ缺スル者此ハ自然ナル者カ骨

質ト同キ痙ヲ襲入セザル様ニ繃傳ヲ施加スヘキ者ナリ

第十七腐骨。此ハ前条ニ説述スル脳蓋ノ諸創後ニ間續テ発起スル者ナリ。殊ニ其ノ創ノ隠伏スル者ヲ速ニ開割メ治療ヲ加ヘザル片ハ能ク腐骨ヲ発起スル者ナリ

其ノ複症ノ脳蓋ノ創ニハ次条ノ法術ヲ處施スヘシ

其一 肉部ノ挫傷アリテ脂膜内ニ血ノ多ク溢入スル者ニ緊要ナル方術即

一 数度ノ刺絡

二 毛髪ヲ剃剪スル了

三 強壮ニメ分解スル薬等

四 清涼ニテ疏滌スル灌腸法及清涼ニスル食物

若シ此諸法ニテ溢留スル血出テス凡七日ヲ経テ焮痛及膿潰ノ徴見ル片ハ

五 脳蓋ヲ開割メ其ノ創ノ所在ヲ探索スヘシ

其二 脳ノ振盪ヲ療スル方術ハ即

一 數次刺絡

二 分解スル藥革

三 劇キ疏滌剤（ピユルゲールミッテル）及疏滌ノ灌腸方

四 脛腿及其佗ノ部処ニ発泡膏ヲ施貼スヘし

其三 脳蓋ノ内ニ溢入スル血ヲ前條ニ記載スルユ方法ヲ施処シテ功ヲ奏セザル時ハ「テレパアン」ニテ穿貫スヘし然氏若し溢流スル血カ脳底或ハ脳腔ニ瀦滞スルモノハ「テレパアン」ヲ施スモ効アラスメ且ツ患者全ク死近ク者ナリ

其四 脳ノ焮痛ヲ療スルニ緊用ナル法方ハ即

一 數度刺絡

二 烊解スル藥革

三 諸清涼剤

四 清涼ニスル疏滌剤ナリ

其五 脳蓋ノ下部ニ在ル膿潰ハ「テレパアン」ヲ施用スルヨリ他術ナシトス

其六 脳ノ海綿状ニ突大出スル者ハ切去リテ

而後適宜ノ柳木綿ヲ施シ壓鎮スヘシ

其七腐骨ヲ療スルニ緊要ナル方術ハ即チ「バルサム」様ノ諸貼薬及ヒ「ヌルロステ」ノ「テレパアニ」ヲ施処スヘシ若シ脳蓋ノ実物カ全ク腐朽スルトキハ種々ノ「テレパアニ」ヲ施用シテ其腐物ヲ除キ去ル可キ者也

其八腐骨ナキ脳蓋ノ創傷ハ乳香精ヲ以テ愈治スルヘキナリ

其九脳膜及大小脳ノ創傷若シ格別深カラザルトキハ乳香精或他ノ「バルサム」様ノ薬ヲ施用スヘシ

其十両脳髄脊髄肋間大神経、八對神経及脳中ニ循ル大血管等ノ深キ創傷ハ必死スノ症ナリ

第十六章顔創

此創モ亦単複ニ分別スルナリ即チ其単症ノ創ハ皮而已ニ創ク者、複症ノ創皮ノミナラス、他肉部ニモ創傷ノ及者ナリ

其ハ單症ノ療法ハ他部ノ単症ノ創ノ療法ニ異ナルヿナシ

其眉辺ニ循ル額神経ノ創傷ハ時トメハ盲瞽ヲ発起ス

其ハ玲瓏角膜ノ創ハ水様液尽ク流出スル者ナリ。此ハ唯閉眼縛帯白葡桃酒ヲ侵メ施ストキハ其創モ愈治スルナリ且水様液モ一再盈満メ故ニ復セルナリ

其剛膜ノ創ハ硝子様液ヲ流出スル者ナリ

若シ此液全ク流出スルトキハ眼球ノ形象ヲ失セメ全ク視司ヲ失却スル者ナリ

其舌ノ一部分ヲ咬切リ或切断スルトキハ「ヒブラツヒ」ノ括嚢様ノ器具ヲ内ニ入レ閉封スベシ。而メ微温ノ白葡桃酒ニ薔薇蜜ヲ混メ施スベシ。口ニ含嗽スルトキハ是而已ニテ治愈スルナリ

其ハ「ステーニヤア」名人ノ唾管ノ創ヲ兼ル頬創ハ嚥食ノ時ニ当テ絶ヘス唾ヲ流出スル者ナリ。然トモ其ハ絶ヘス流出スルハ其ハ創ノ最大ナル者ナリ。然トモ

此創ハ唯頬ヨリ口中ニ穿貫スル片ハ治愈スルヿ此唾管ノ一ニ聚會スル處ノ管ノ一個ノ創ニハ毎日極末ノ赤汞ヲ節ヒ摻テ而其ハ患処ノミヲ押壓スル傳帯術ヲ施ス片ハ治愈スルナリ若瘢けノ流膈スルヿ止タルハ即傳帯ヲ觧キ去テ乾撒糸及カスカヒ膏ヲ施スベし

其ハ唇ヲ縦ニ切タル創ニ若し其ハ總実体ニ通徹セザル者ハカスカヒ膏ヲ以テ愈着スベし若し其ハ全ク切タル者ハ轉絡回纒ノカスカヒ術

頸（ハルス）

ヲ施スベし

其ハ瞼ハ鼻ハ耳ノ創傷ハ只カスカヒ膏ヲ施し愈スベし

其ハ頬ノ横ニ通リタル創ハ只他ノ部処ハ平常ノカスカヒヲ施メ治愈スベし

第十七章　頭創

此創モ単複ニ分別ス

其ハ単症ノ創ハ他部ノ単創ノ治療ト法方異ナルヿナし其ハ方ハ即カスカヒ膏ヲ貼シテ愈ス

ベし
其気管ノ創ハ全ク切タル者ト一部分切タル者ト
ノ両症アルナリ其全ク切タル創ハ必死ノ症ニ
〆其ハ一部分切タル者ハ縫合〆愈着スベし其ハ
気管ノ長形ノ創ハ唯カスカヒノミヲ施スベし
其食道ノ創ニ〆手術ヲ施スヿヲ得ベキ部ノ
者ハ治スルヿヲ得此食道創ノ吧吐ニ由テ全
破裂スル者ハ死ス
其返行神経ノ創ハ声唖スル者ナリ

凡テ其脊椎八對神経幹、肋間大神経、横膈神
経、頭頸動脈、内藏腑動脈等ノ諸創ハ必死トス

第十八章 胸創

此創モ亦通徹シタル者トセザル者トニ分別スル
ナリ而其両症ヲ又各単複ニ細別スルナリ
其通徹セル複症ノ者ハ
一 胸腔ニ血ノ溢入スル者
二 肋間動脈ニ波及スル創
三 肺ニ及フ創

四 他ノ内藏ニ及フ創ナリ

其通徹セザル單症ノ胸創ハ唯カスカニ膏ノミヲ以テ治スルヿヲ得ル

其通徹ノ單症ノ胸創ノ大ナルハ見テモ知ル揃皃ニテモ知ル又呼吸迫促シ或蠟燭ニ火ヲ點シ其ハ創前ニ置クニ火炎カ呼吸ノ為ニ動カサルヽ等ニ由知ルナリ此創ニ亦同クカスカニ膏ヲ以テ治スルヿヲ得ヘシ

其胸ノ両腔内ニ通徹セザル創傷ニ若シ空気カ其内ニ襄入スル片ハ必死

其通徹セル胸創ノ肋間動脈（後方）ヲ毀傷メ脊髓ノ近傍ニ及フ者ハ必死トス然モ其ハ脊椎ノ側ニアル創ハ其前面ニ在ル創トハ血管ヲ緊縛スルカ或押壓術ヲ施カニテ出血ノ閉止スル片ハ治愈スルヿヲ得ヘシ若シ棄置スル片ハ則チ死スルナリ

其胸腔中ニ血ノ漏入スル胸創ハ呼吸促迫喘及昏悶ヲ発シ而メ患者其平全ノ方ヲ下ニメ臥ル片ハ自ラ重ヿヲ覚ル等ニテ察知スルヿヲ得ルナリ

此症ハ先溢入スル血ヲ決除スヘシ其法即チ
一 其創ノ方ヲ下ニ〆不絶臥ヘシ
二 銀ノ胸挿具ヲ以テスセ
三 吸器ヲ以テス
四 胸ヲ開割スルヿハ若シ其胸腔中ニ溢溜スル
血ノ決泄スルニ余リ創口ヵ狭窄セルトキハ鋒鋩刀
ニテ開割スヘキモノナリ
若シ胸腔中ニ溢流スル血固凝結〆外出スルヿ
不能トキハ大麦煎汁ニ薔薇蜜ヲ加テ銃射スヘシ

其肺創ハ鮮紅ニ〆泡沫アル出血及迫息スル喘ヿ
ニテ知ルヿヲ得ル
其肺ノ小創ハ先初ニ其溢溜スル血ヲ不残決除
〆而後自然ニ任セ置ヘシ
其肺ノ大創ハ必死トス何者出血甚多ク或労
瘵ヲ発起スル故ナリ
其心室或心耳ニ穿徹スル創ハ必死ナリ然尼
唯心ノ実体迠ニ及フ創ノ幸ニ心動脉瘤(不觧)ノ續
キ起ラザルトキハ未必死トスヘカラス幾ク治スベキ

者アリ
其横膈膜ノ創ハ若シ腹藏ノ上騰メ其創口ヲ
穿竄シ胸腔ニ溢入スル者死ナリ然トモ若シ
然ザル片ハ或ハ治スル丁得
其胸創ノ乳糜管、気管、食道、血脈大幹、神経
等ニ及者悉ク必死ノ証ニ属ス
其心胞内或胸腔ノ後室内ニ血ノ瀦溜膨溢ス
ル者ハ胸ヲ開割メ決除スル丁能ザルカ故ニ是亦
死症ナリ

第十九章腹創

此創モ亦胸創ト同ク穿徹スル者、セザル者ト二分
別スル、其穿徹スル症又単複ニ細別スルナリ
其穿徹セザル創ハ只聚合スル傅帯術或カ
スカヒ膏ヲ以テ治スル丁ヲ得之
其穿徹シタル腹創ノ若ハ横断スル者腹カ分
ヒヲ以テ治ル丁ヲ得ルナリ若シ縦断スル者聚
合ノ傅帯術ヲ施メ治
其穿徹シテ視症ハ即

(一) 網膜及諸腸(ペンス或ダルメン)ノ一部分ガ其部置位ヲ分离
令メタル創
二 上件ノ物ノ創ノ創口ニ挾挿スル創
三 内藏ニ及創
四 内藏ノ死瘅スル創
五 腹腔ニ血液ノ溢留スル創等ナリ
若シ其ハ腸網及諸腸(ダルメン)ノ一部分カ狹窄ナル創口
ニ塡塞スル𪜈ハ其創口ヲ割闊メ其ハ塡充スル物
ヲ腔内ニ収納シ而メ後腹カスカヒヲ以テ愈

着セシムヘシ
若シ其腸ニ創ク𪜈ハ即突創ハ全ク切タル創ト
全切ザル創トニ分別スルナリ而メ其ハ腸ノ突創
ハ自然ニ任セ置クヘシ其ハ全ク切タル者或ハ半切タ
ル者ハカスカヒヲ施スヘシ若シ其ハ全ク切タル創ノ
両端ヲ聚合愈着スルヿヲ得ザル𪜈ハ其ハ上端ヲ
外部ノ創口ニ引出シ縫合メ而其ハ腹部ニ別ニ
肛門ヲ製造スヘシ
若其脱出セル腸網カ已ニ死瘅スル𪜈ハ即其死瘅

スル部分ヲ切断スヘシ
若シ其ハ脱出セル諸腸ノ已ニ死斃スル時ハ即其部分ヲ全切断メ而其両端ヲ合縫メ愈着令ムヘシ
其腹腔ニ血液溢溜スル時ハ其空隙ノ下部ニ當テ膨脹スル者ナリ而若シ自然ナル者カ其溢瀦スル血液ヲ導去セザル時ハ其脹膨スル部位ヲ割刺メ其瀦溜液ヲ決出スヘシ
若其腹腔ニ溢流スル血液ヲ閉止スルコトモ能ワス又外出スルコトモ能ザル者ハ必死ノ症ナリ

其横骨(ベッケン)内及腰ノ空隙ニ血液溢流スル者ハ間死ニ就ク者ナリ
凡上條ニ記述スル諸説ニ因テ其ハ肝、脾(ミルト)、胃(マーグ)及膵、腎、輸尿管、膀胱、子宮、乳糜管等ニ於テ彼ノ創ノ必死此ノ創ノ棄置スル時ハ死ル等ノ理ヲ辨知スルコトヲ得ルナリ蓋シ諸創ニ於テ溢流スル血液ヲ防止スルコトモ得ス亦決出スルコトモ得サル者ハ必死ス
凡テ此諸部ノ創傷ハ其各屬ノ兼スル症候及其ハ

各流出スル液汁等ヲ以テ彼ノ創此創ヲ名ルコト
ヲ諭知スルナリ。即此諸器ノ突創ノ其外部
ノ創口ヲ開割スヘシ。其故ハ即チ

一 其溢瀦スル血ヲ決導セシカ為ナリ

二 其創ヲ受ル内蔵ニ緊要ノ貼薬ヲ施カ
為ナリ

三 其創口ニ創ヲ受ル腹蔵ノ脱出スルヲ防
止スル腹カスカヒヲ施ニカ為ナリ

第二十章 挫傷

此症ハ皮下ニ在ル細管或繊維ノ鎮壓セラレ或
破裂スル者ニシテ。脂膜内ノ管中ニ在ル。血カ運動
ヲ失トモ。或其ハ管外ニ溢出スル者ナリ

此傷モ亦単複アリ。其単症ノ挫傷ハ。只皮ノミ
ニアル者ナリ。其ハ複症ノ挫傷ハ皮ノミナラス他
部分ニ及フ

其ハ血液ノ管外ニ溢出スル。挫傷ハ疼痛シテ其ハ色鉛
色或紫色ヲ帯ル腫ニシテ多ハ格別腫起セザルナリ

此治療ノ方法ハ即

一 焮解メ多ク強壮ニスル蒸薬、即チ

其方 「ヲノシカラー」止焼酒、水三味ヲ交混メ「サルアルモニヤク」ヲ加ヘ、或加ヘス尤宜シ。殊ニ「ミ」ニテデニウム（塔列里）精半「ヲンス」二戔四ト水一「ヲンス」トヲ混メ蒸トキハ甚宜シキナリ

二 寡多限ラザル数次ノ刺絡

三 疏條剤及清涼ニメ稀釈ニスル飲剤ヲ用フヘシ

若シ其管外ニ溢出スル血ノ甚タ過多ニメ諸管ヨリ道輸メ散流スルヿ難キトキハ、穿刺メ其血ヲ決出スヘシ。即其血ノ諸管ヨリ道輸セラレテ散流スル。徴ハ鉛色ノ腫カ雑斑色、或蒼色或黄ハ色ニ変移スルナリ

其複症ノ挫傷ハ各其傍ニ兼スル症ニ随テ、種々ノ治法ヲ施スヘシ

其皮ノ挫傷、ハ諸膜内ニ血溢入メ紅瘢及焮痛ヲ起発スルナリ

其筋ノ挫傷ハ疼痛メ動揺スルヿヲ得サル悉

患ヲ発起スル者ナリ
其神経ノ挫傷ハ麻痺攣急焮痛及双痺ヲ
起発スルナリ
其大血管ノ挫傷ハ甚夥多ニ血ノ溢出メ直或
不直ノ動脈破裂静脈破裂等ヲ起発スル之
其ハ水脈ノ挫傷ハ水腫様腫及鹹液腫諸他ノ
水腫様ヲ発起スル者ナリ
其腺ノ挫傷ハ焮痛膿潰節核腫、蟹腫等ヲ
起発スルナリ

其靭帯ノ挫傷ハ、焮痛シ動揺スルコトヲ得ス、海綿
腫、関節強直、及諸骨ノ離隔スルコトヲ発起スル之
其ハ骨膜ノ挫傷ハ焮痛膿潰腐骨腫等ヲ発起
ス
其ノ髄ノ挫傷ハ、骨損傷、骨破裂、腐骨、骨腫 脂肪腫
等ヲ発起ス
其頭ノ挫傷ハ脳震盪、脳蓋膜、及副脳膜ノ破
裂「ヒキウビル」或逆冒破、或損傷、或脳蓋壓凹
或脳蓋ノ腐骨或脳中ノ空隙ニ諸液ノ溢入

スル者或水頭解顱等ヲ発起スル者也
其眼(ヲーゲン)ノ挫傷ハ、出血。破裂。膿潰。焮痛、及盲ヲ起
発ス
其耳(ヲール)ノ挫傷ハ、耳聾、出血、臭気、焮痛ヲ発ス
其鼻(ニウス)ノ挫傷ハ衂血閉塞鼻痔ヲ発ス
其口(モンド)ノ挫傷ハ、腫瘍、歯脱及損傷ヲ発ス
其頸ノ挫傷ハ、気管破裂、空腫、咽喉焮腫。唖、
気急壅塞、等ヲ起発ス
其胸ノ挫傷ハ、傷胸痛、肺焮痛。吐血、癆瘵(テーリング)胸

膿、及胸腔ニ外気嚢入シ及空腫ヲ発起スルナリ
此症ハ肋骨損傷スル者セザル者トアリ
其脊椎ノ挫傷ハ、四支麻痺、亀背。血尿死痺及
遺尿ヲ起発ス
其腹ノ挫傷ハ気絶、疼痛、衂血。血便(ブルードピス)及死ヲ起ス
何者肝、脾、子宮ノ壁壊セラルヽ故ナリ其妊
婦ニ在テハ小産。子宮出血、腹損傷。子宮脱垂
ヲ発起スル者ナリ。其睾丸ノ挫傷ハ、焮痛、気
絶、頑硬、血脈破裂。肉破裂及ヒ諸他ノ真ノ破裂

ヲ起発スル也

外科新書巻二

遠西 不沴吉 著

西肥 永保吉雄權之助 譯

潰瘍篇

第一章 總論

潰瘍トハ人体脆柔ノ部分ヨリ膿液ヲ醸蓄シ肉ノ離レテ久キ者ヲ云

其因五種アリ

一　以前創ヲ受テヨリ起リ

二　挫傷ヨリ起リ

三　焮痛ヨリ起

四　辛辣液一部分ニ瀦留スルヨリ起

五　外部ニ辛辣ノ物ヲ敷敗メヨリ起

又潰瘍ノ浅深ニ因テ単複ノ二ヲ区別ス。

其単症清浄ニシテ腐敗セズ唯葦ハカリニテ脂肪ニハ及ハズ

其複症ハ膿腔有モノ

其潰瘍ハ多種アリ即チ

其一　膿窠　ホルレズヱール

其二　瘻状ノ者　ペイプスヱール

其三　複肉ノ者　ヹールトアフチフ

其四　海綿状ノ者　スホンスアフチフ

其五　豚白肉様　スペツキヘ

其六　壊血性ノ者　レケウルホイキヘ

其七　黴毒性　ヘネリセ

其八　蟹甲状　カンケルアフチヘ

其九　腐骨アル者　ヘーンベテルへ

其十　「フルヲウテルテズベール」　経久

其十一　死肉アル者　フルステル ヒニグ

其十二　多膿性ノ者　エローテ フルエッテリング

其十三　蚘瘍　ラヲルム スヱール

其十四　痂性ノ者ナリ　コルスチへ

第二章　単潰瘍

此症ハ清浄ニシテ腐敗セス良底有テ良膿ヲ醸熟スル者ヲ云○良膿トハ少紅色帯ヒ味臭ナク乳ゲ(メルク)ヨリハサク固キ者ヲ出スヲ云○良底トハ凹凸ナク平ニシテ痛マス後紅色ヲ帯ヒタル者ナリ○此症ハ堅固ナル人ニ於テ以前患タル瘍創或ハ膿腫ヨリ発起ス

此治療ニ意ヲ注ク可キハ上肉造膚ノ外ニ事ナシ○其上肉剤ハ金瘡水アーテニヒユルクノヲンドバルサム」及其他ノ「バルサム」様ノ者ハ肉ヲ上ル者ナリ○其造膚剤トハ即乾燥剤ナリ

其方ハ鉛水(ロートウヲートル)或乾撒糸或明礬水(アリユイシウヲトル)ニ漬シタル

乾撒糸或焼酎或其他土様（アールトアッチヘ）ノ散茀（フーヱル）ヲ施スヘシ

第三章「ホルレスベトル」膿巣瘍

其一 此症ハ脂膜中ニ膿ヲ醸畜スル嚢銭ノ幾千箇モ有ル者ヲ云

此治療ハ

一 金瘡水ヲ射注スヘシ

二 物ヲ外エ佼リ出ス様ニ巻木綿ヲ施スヘシ

三 腫類ヨリ外ニ膿ヲ出ルニ便ナル処ヲ穿穴ス

○此治療ヲ施スノ外ハ単巻法帯ノ如ク療スヘシ

四 潰口ノ銭箇モ有テ一時ニ開割スヘシ○

第四章「ペイプスベール」瘻瘍

其二 此症ハ膿窠ノ属美ヲ而メ其口狭窄ニメ周囲堅硬肉有ル者ヲ云

此治療ハ

一 堅硬肉ヲ除去ルヘシ

二 膿窠ヲ崩割スヘシ

三 其瘻ヲ乾燥サスヿ

其堅硬肉ヲ除去ニハ

一 日ニ「アンチモニー ボルトル」ヲ附貼スベシ

二 其肉ニギザリヲ入或切去ルナリ

三 樟脳及緩和ニスル方ヲ以テ烊解スベシ

堅硬肉已ニ除クトキハ其膿瘻ヲ崩割シ其ハ法膿窠ノ療術ヲ以テスベシ猶又瘻ノ蔓リヲル部分ヲ一時ニ開割スルトキハ治スルコト尤速也其故ハ堅硬肉膿瘻共ニ除キ去レハナリ

第五章「ヱールトズウェール」頑肉様ノ潰瘍

其三 此症ハ廣濶ナル潰瘍ニシテ其口ニ頑肉様ノ者在ヲ云ナリ 此症年月（ヤールマーン）ヲ経タル者ナリ

此治療ハ先頑肉ヲ瘻瘍ノ治療ニ随テ取去ルベシ而潰瘍腐敗ナク清浄ナルトキハ単潰瘍ノ治療ヲ以テスベシ若シ不清浄ナルトキハ樟脳「スレイム」或「レンプレイキス」膏ト樟脳ト等ニ合セ附貼メ巻木綿ヲ施スベシ且ツ又其内服ハ樟脳硝石等分ノ末ヲ日々二戔ツヽ與フベシ

第六章 海綿状癌 スポンスアフテイク フレーセズウェール

ウラフトン

其四　此症ハ海綿（スポンジアシテ）状ノ肉ニメ軟カク赤黒色ニメ物ニ觸レテ疼ニ痛セス甚出血シ易キ者ヲ云ナリ

此症四種アリ

一「ウラウト上」様ノ肉潰瘍ノ底ヲ彼此ニ疣ノ如ク和カナル者ツフ〻〻トメ有モノナリ

二　潰瘍ノ底一面ニ海綿様ノ肉有モノナリ

三　海綿状ノ肉潰ロヨリ高起メ堆凸ナル者之

四　肉海綿様ニメ劇痛アル悪性ノ者之

此治療ハ第一者ハ地獄石（テーピス インヘリナリス）ニテ除去ヘシ○第二ノ者ハ枯礬ヲ撒リ掛ケ或明礬ト「アニゲリヤ」国ノ腐蝕剤トヲ等分ニテ交シノ赤汞（メリクリスルブルプレ上ペル）ヲ加ヘテ撒リ掛ヘシ○第三ノ者ヲ除キ去ニハ或結ヒ切リ或ナテ切リ或烙鉄或樟脳辣油ヲ貼メ消蝕スヘシ○第四ノ者ハ樟脳辣油ヲ貼メ消蝕シ或「ウラルピロイト」散ヲ撒リ掛ケテ除去ヘシ○此症共ハニ海綿状ノ肉除キ去トキハ再発セサル様ニ其患処ニ乾燥剤ヲ附貼メ傳帯ヲ施スヘシ其ハ方鉛水或樟脳末ヲ撒掛ケヘシ○其内服

ウルヒコロイト　虎尾草ト云リ

ハ樟脳硝石(サルペートル)等分ニ規那(キナ)皮ヲ加テ與ヘし

第七章「スペツキゲヴウユル」豚白肉様潰瘍

其五 此症ハ瘍底ニ腐織メ豚白肉ノ如ク成タル者附着シ在ヲ云ナリ

此治療ハ最初ニハ勉励メ清浄スヘし其法即

一「イニシユニトアケヒレヤコム」

二 乾海綿ヲ以テ拭取ヘし

三 其潰瘍ニ底ニ礼面ノ精気ヲ塗テ即其上ヨリ大麦一味ノ糊剤(パップ)ヲ施置

四 此患ノニ関係スル者ハ甘汞(ドルシス)ノ細末ヲ撒拭ヘし

此如ク此肉已ニ除テ清浄成ル片ハ畢竟潰瘍ノ治療ニ随テ治ヘし

第八章 壊血状瘡 「ミケウルホイリアフイヘスウエール」

其六 此症ハ諸液カ壊血性状ニ変スルヨリノ発スル潰瘍ニメ甚難治ナル者ナリ

其諸液(アルレホイト)カ壊血性ニ変ル標的ハ其人ノ齦海綿状ニメ甚出血シ易ク或蒼紅色又曇紅色ノ斑ヲ四支ニ発シ及ヒ身体常ニ労倦シ殊ニ

膝骨節疼痛スルナリ

此瘍ハ海綿状ノ肉ヲ附着メ周囲鉛色ナリ此レ肢ニ多ク殊ニ膝骨及足踝ノ周囲ニハ尚多ク且ツ其ハ部ニ在トキハ甚疼痛ス者ナリ

此治療ハ内服ニ野牛乳、牛乳或鶏煎汁ノ内ヘ此病ニ宜キ野菜ノ絞汁ヲ加テ用ベシ又ヨク熟タル新鮮ノ菓実ヲ頻ニ進ムベシ○若シ冬旹ニ有テ新野菜及菓実ヲ得ルヿ不能トキハ兼テ野菜菓実ノ沢山ナル時ニ貯置ベシ

其ハ貯難キ者ハ濃キ太陽煎ニメ置○外用ニハ灰水或丹礬水或丹礬精一戔ヲ車前水八戔ニ混合シタル者或バジリキュムニユンクエントニテソー去ムト及極末ノ金炉釉唐土、芦眼石ヲ混交シタル者等ナリ、且ツ此膏ヲ以テ其周囲ノ鉛色ノ部ニモ薄ク塗ルベシ而物ヲ外ヱ押出ス様ニ傅帯術ヲ施スベシ○此症ハ体ヲ運動セシムルヿ大療法トス

食物ノ中ニテ最モ諸古者塩蔵ノ者或魚炙

ミタル者等ヲ禁スヘシ　諸ノ汞剤（シイツキミツテレン）ノ此諸症ニ
用ルトキハ甚害アリトス

第九章「ヘーニユスゲヅウエル」　梅毒瘍

其七　此症ハ梅毒（フランシレキーテ／スハンセホツケン）伝染（ベレソツト）ヨリ起因（ヲールサーケン）スル者ヲ云
此標的ハ当時梅毒ヲ患フルトキハ、勿論或已ニ
前患タルヲ以テ知ル、其徴候ハ即淋疾、下疳、
便毒、咽喉潰瘍、額及其他ニ痂瘡ヲ発シ
頭及ヒ四支ノ疼痛ヲ発シ骨隆起スル等ノ
如キ者也〇此潰瘍ノ常ニ「ホートル」様ニ腐敗シ
タル膿ヲ出スナリ、凡其発処ハ肘節、足跗、関節
亀頭、及ヒ陰皮、尿道、咽喉、鼻、上唇、額、腹股合縫、陰
唇、陰茎等ナリ
此治療ハ内服ニ汞剤及草木根煎剤ヲ与フヘシ
即其ハ方

甘草　一戔　白旦　抜葛（レーナウヲルテル）各二十四戔

右水百六十戔ノ内ニ一昼夜浸シ置テ而者テ
半ヲトリ此ヲ日ニ九十六戔ツヽ与フヘシ
外用ニハ一床水ニ適宜ノ猛水（スーブリクワール）ヲ和シ洗或ハ造膿

膏ニ赤汞ヲ加テ貼スヘし

此痂瘡ニハ家猪油八戔ニ白汞六分六厘或一戔ヲ混和シタル者ヲ貼スルヨリ外ニ良法ナシトス

咽喉及陰門(フローレイキ)潰瘍ハ緩和剤ノ煎汁桃膠(ゴムシイツキ)汞丸ヲ鮮キ加テ水銃(スホイト)ヲ以テ射注スヘし

尿道潰瘍ハ挿蝋(ヘチースカラクチヨカルレイ)ニ造膿剤ヲヌリテ挿ヲ入ヘし

第十章「カニクル」ゲツウヱル 蟹瘍

其八此症ハ「カニクル」様ノ辛辣液ヲ含畜シ或「カニクル」様ニ関係スル潰瘍ヲ云ナリ。此候ハ稀釈ニシテ少ク黄(ゲール)色(キリュン)ヲ帯ヒル辛辣ノ腐敗液有テ其潰瘍ノ周囲ヲ衝シ腐蝕蔓延シ臭気近ヘカラス其痛ニ有テ須手トメ諸薬功ナキ者ナリ

クヌースト 結節

此潰瘍三種アリ

第一「クヌースト」ト様ノ「カニクル」潰瘍 此症ハ以前ニ「クヌースト」腫有テヨリ起源スル者ニシテ其周囲腐蝕セラレテ翻花シ黄色ニメ臭気甚

ウラット疣贅

シク且ツ焮痛アリ

第二 神経(セイニュー)「カニグル」潰瘍　此症ハ凡テ顔面ニ発シテ「ウラット」ヲ毀傷シタルヨリ発シ或ハ顔面ニ発ス青赤色ノ小瘡ヨリ発ルナリ此症ハ海綿様ノ肉少モ在コトナク其周囲ノ皮ヲ腐蝕スル者也

第三 海綿状(スポンスアルチゲ)ノ「カニクル」潰瘍　此症ハ甚ダ翻花シ及ヒ高起シテ疼痛甚シク且ツ臭気近クヘカラザル者ナリ

此治療ハ決シテ常ノ法剤ニテ治スヘカラス。神奇ナル方ニ非スハ用ルニ勝ヘス然レトモ先哲ヨリ今ニ至ル迄全治スル法ヲ発明セス

右三種ノ者各治法ヲ異ニスルナリ

第一ノ症ニ於テハ或人称誉シテ「レキューター」ヲ内外ヨリ用テ功有トス「レキューター」ヲ外用スルニハ或蒸剤ニシ或糊剤ニシ或膏剤シ或実物ヲ直ニ附貼シ或白灰汁ニテ濃色侵シ付貼スル等ナリ○内服ハ其白灰汁ニノ色侵ノ者ハ

毎日二十「デルイ」ツヽ與フヘシ
第二ノ症ニハ車前自然汁甚功有ルヿヲ親ク
見タリ　又テーテンノ煎劑ホニレキユーメヲ加テ用フ
第三ノ者ニハ新キ胡蘿蔔ノ糊劑ヲ貼スルヿ
要用タリ。殊ニ此劑ニ「ウヲルレコロイド」ノ散ヲ
加テ宜キナリ右糊劑ヲ用タル跡ヘ樟脳（ペーテンデカンフルオーリー）ニテ煉
油ヲ附テ宜トス○又此症ニ樟脳ヲ内外ヨリ
用ユルヿ甚効アリ○若シ此方ニテ少シモ功ヲ
奏セス。且ツ其ハ部分宜ク或其術ノ妨害

スルヿナキ処ナレハ切リ除ヘシ

第十一章　腐骨瘡　スヰールメットベーンヘデルフ

其ハ此症ハ内ノ部分ニ在ル潰瘍ニ腐骨ノ係
テ居ル者ヲ云
此症二種アリ
其一　腐骨ノ顯然トシテ見ヘキ者
其二　腐骨ノ隱然トシテ見ヘカラサル者
第一ノ者ニハ骨色及骨質ノ変異スルヿヲ見
テ容易ニ知ルヿヲ得ヘシ

第二ノ者ハ凡テ海綿状ノ肉ニテ腐骨ヲ掩フニ由テ知リ難キナリ唯腐敗シタル臭気及黒色メ稀釈ナル悪臭液ヲ出スニ及ヒ探具ニテ骨ヲ乾枯シタルヲ探リ見テ知ルナリ。然レモ或此徴ノ當ラサルコアリ其故ハ又別ニ一種ノ潰瘍有テ固ク黒稀ノ臭液ヲ出スレモ骨ハ腐ラサル所故ニ甚タ紛ハシク且ツ腐骨疽毒ニ必ス如此黒諸液ヲ出スニ非ス尚又皮而已ニ在ル潰瘍ノ座大ニシテ正中ニ水泡有テ夫ヨリ白キ液ヲ

滴出セシニ其肉下骨大ニ腐敗シタル者ヲ見タリ此治療ハ都テ其腐骨ヲ堅固ナル骨ノ部分ヨリ除キ去ラザル時ハ決メ治セサルナリ其腐骨ノ除キテ後腐蝕剤ヲ施ニカ為ニ其骨ヲ掩フタル海綿状ノ肉ヲ刀ニテ切去リ或又腐蝕剤ニテ消除スヘシ其防腐剤ハ骨病篇ニ見タリ

第十二章「フルラウデルケスウエル」 注ニ潰瘍

其十此症ハ甚巳年月ヲ経タル者或治スルニ難キ

者ヲ云ナリ○此潰瘍ノ発処ハ脛骨ニテ其ハ周囲石
硬或水腫様ニ腫レ押テ見レハ凹陥ニナリテ
其肉ヨリ稀釈ナル臭液ヲ夥ク漏出スルナリ
○此治療ハ慢リニ外薬ヲ用テ治ルトキハ甚危殆
ナル胸病ヲ発起ス。殊ニ老人(ヨーデマン)及病身ノ者愚
ルトキハ治セス。或体中ノ諸液性ノ変スル者モ
難治ナリ然𪜈少年(ヨンゲン)ノ者及棄置テ治療ヲ
施サス只年月ヲ経テ古(ヨーデ)ク成タル者ハ容易(オンデマーツカ)
ニ治スルコヲ得ヘシ○老人病身ノ者及変液(フルアンデルトホット)

ノ者ニ起ル症ニハ内服ハ樟脳硝石ヲ与フヘシ外用ニ
ハ樟脳精或樟脳膏等ヲ貼スヘシ○少年ノ
者及棄置タル者ノ症若シ不清浄ナルトキハ
一「テレメンテイン」精
二 緩和糊剤ヲ施スヘシ
若清浄ナルトキハ
一「インクエントニテリツト」八戔ヲ極末ノ金炉粕
白堊芦眼石三戔ヲ加ヘテ貼スヘシ
二 物ヲ外ヘ俊出ス様ニ傳帯術ヲ施ヘシ

第十三章「スエールメツトフルステルヒンク」死痺瘍

其十一此症ハ凡テ其内青白色ヲ帯ヒ且ツ寒冷ニシテ知覚ナク漸々黒色ニ変シテ臭気甚シキ諸潰瘍ハ皆此ニ属ス

此治療ハ内外ヨリ腐敗ヲ防止スル剤ヲ処スヘシ○外用ニハ其患上ニ樟脳末ヲ撒掛或「テンテイ乙」精ヲ塗テ其ハ上ニ樟脳精ヲ貼シ或「アロマチーケ乙」ノ糊剤ヲ施スヘシ○内服ニハ毎一時ニ樟脳二分解熱皮(キナ)五分ヲ合

(二　伏二時五日一時也)
(三)

テ与ヘシ

第十四章 過膿「ゴロートフルエッテリング」

其十二此症ハ乳岩(カンケル)脱疽等ノ患者有テ四支乳房ヲ切断シタル後過多ノ膿液ヲ漏出スル処ノ瘢創腫瘍ノ類ヲ云ナリ○此症ハ気力(レーヘンスカラクト)衰弱シ気絶シ羸痩等ノ患起リテ或死ニ至ル者アリ○此潰瘍ハ青白色ニシテ水綿状ノ肉ヲ附着シ而シテ其膿ヲ諸管ニ升騰セラレテ血ト共ニ混シテ体中ヲ運行スル片ハ斃死ニ至ル

ヘキ下利ヲ起発ス
此治療ハ外用ニ焼酒或金瘡水或海綿ノ上ニ
乾撒糸ヲ掩ヒ以テ貼スヘシ
内服ニハ解熱皮ヲ与フヘシ

第十五章「ウヲルムウヲンデ」 蚘瘍

其十三此症ハ潰瘍ノ内ニ微小ノ虫満ヲル者ヲ
云ナリ
此治療ハ潰瘍ノ外用ニ先初五六日「テレメンテイン」精或樟脳或甘汞或芦薈ノ色浸或
「ヲキシレルヒツテルヨール」ヲ貼メ傳纏スヘシ而メ小虫
除キ去ル時ハ速ニ其ノ瘍性ニ隨テ療スヘシ

第十六章 コルスチヘ スシヱール

其ノ十四此症ハ潰瘍ノ上ニ乾燥メ硬クナリノタル痂ヲ蓋フ者ヲ云ナリ
此治療ハ緩和スル貼剤ヲ外用メ烊化セシメ
而メ除去ヘシ。其後ハ其ノ症ニ隨テ治療ヲ
ナスヘシ

乾当作乳

潰瘍所在部

第一章 潰瘍所在区別

潰瘍ノ頭、鼻、耳、唖管、下顎、咽喉、上顎、口中、項、胸、乾(不解)、肛門、會陰、等ニ在ル者ヲ細別メ此ニ論ス

第二章 頭潰瘍

此症ハ髪ノ生スル頭(ホーフト)部ニ在ル潰瘍ヲ云ナリ

此症二種アリ

一 「レキユルフト」頭瘡

二 「ホーフトセール」白禿瘡

第一ノ者ハ甚痒クメ黄ハ水ヲ泄出スル処ノ小瘡

第二ノ者ハ乾燥メ其ハ色或白(ウイッテ)或ハ黄(ゲール)或ハ萠黄(グルーン)ハ或青(ブラーユト)等ノ痂瘡ニメ甚治シ難キ者ナリ

此治療第一(エールステ)ノ者ニハ屢々下剤(ヒルゲルミッテル)ヲ与ヘ且ツ日々血ヲ清涼ニスル薬剤ヲ与ヘ外用ニハ緩和剤ノ煎汁ニ薔薇蜜ヲ加テ洗フヘシ〇此症ニハ乾燥

圏外用ニハ昇汞水或ハ玄球香油ヲ用ベシ

剤ヲ忌ムナリ若此剤ヲ用ル時ハ危殆ナル他
病ヲ発起スルナリ○第二ノ者ニハ内服水銀剤(シイツキミツテル)
ト下剤トヲ与ヘ外用ニハ緩和スル革汁ニ「ヨニース」
根ノ煎汁少シ混メ洗ヘシ尚斑猫軟膏ヲ一月
モ持重メ貼シ強ク潰膿セシムルヿ最宜シキ方
トス

第三章 鼻孔潰瘍

此症ハ鼻中(ニウスガット)ニ生スル悪症ノ者ヲ云ナリ
此症三種有リ

一 「カンクル」様ノ者
二 梅毒(ヘーニユース)ヨリ起ル者
三 腐骨ノ添テアル者
此治療ハ三症毎ニ各異ナリ○第一ノ者ハ
「コエータール」ヲ内外ヨリ用ヘシ○第二ノ者ハ
水銀剤ヲ用ヘシ○第三ノ者ハ乳香精ヲ
用ヘシ

第四章 耳竅(オールガット)潰瘍

此症ハ聴道ノ口ニアル潰瘍ニメ臭気甚キ膿

液或血液流出スルヲ以テ知ルナリ。然レ𪜈潰瘍
無〆或如此ノ液ヲ出スヿアルナリ〇若シ此
潰瘍ニ聽骨ノ腐敗添テ居ル者ハ甚難治
ノ者ナリ
此治療ハ前ノ両症共ニ「芸香油」ト「シキユータ」ト
ノ煎汁ニ薔薇蜜ヲ少シ混シテ射注スヘ
シ〇其腐骨ノ添タル者ハ白蒲桃眉皮葉ヲ
少シ加ヘ煎〆射注スヘシ此療ニテ効ナキハ
其他法方ナシトス

第五章 唖管潰瘍

此症ハ潰口ヨリ津唾ノ流出スル者ニ〆殊ニ
食スルニ當テ多ク流出スル者ナリ〇此治
療ハ
一 瘻管ヲ傳テ穿貫スヘシ
二 蠟引ノ綿糸ヲ以テ瘻管ヲ穿透シ其
両端ヲ頰ノ外面ニテ緊ク引張シ其ハ上ヲ
カスカヒ膏ニテ緊貼スヘシ
三 若シ其瘻肉カ癈皮ノ如ク頑麻枯燥スル

時ハ其外口ヨリ「アンチモニーボートル」ヲ貼シ
腐ラシメテ其皮ヲ剥切スヘシ而後ニ常法ニ
随テ治療ヲ処スヘシ

第六十三章　下顎瘻

此症ハ腐朽ノ歯有ル者ニ間ニ顎骨ヲ穿貫スル処ノ瘻瘍ヲ発起スルナリ
又一症「ヒフモリヤアーニセースレイムーホルテ」ノ腐骨及潰瘍ヨリ発起スル
上顎瘻ハ甚治シ難キ者也

此症治療其下顎瘻ハ其腐朽セル歯ヲ除去ル時速ニ治ル者ナリ若シ其歯ノ著ク知ルヘカラザル時ハ一ノ道具ヲ取テ其瘻ノ近傍ノ歯ニ觸抵レテ病者ノ最モ痛ヲ覚ル者ヲ認得ヘシ此即チ其ハ瘻ノ起因スル歯ナリ〇其上顎瘻ニ処スル処ノ要法

一　第三上歯ヲ抜去ヘシ
二　其抜除キタル歯窠ノ底ヨリ鋭尖ノ力ヲ入テ「スレイムホルテ」ニ徹スル迄穿貫スヘシ

三「ルーヌヒ」ノ舐汁ニ樟脳及日剤（チニキテユウル）ノ没薬薔薇蜜ヲ加ヘタル者ヲ以テ其穿徹セル歯底ノ穴ヨリ射入スヘシ

第七章　咽喉潰瘍

此症ハ凡梅毒ヨリ起発スル潰瘍ナリ

此治療外ニハ嗽剤中ニ甘汞ヲ少シ加テ與フヘシ内服ニハ汞剤ヲ処セスンハ非ス

第八章　上顎内面潰瘍

此症モ前症ト同ク凡テ梅毒ヨリ起発スル潰瘍ナリ○或人其梅毒ヨリ起ラス〆カヽシヒ」様ノ悪症（クワードアルトド）ノ者ヨリ起者有之

此治療ハ前症ノ治療ニ異ルヿナシ若咽頭骨腐決〆鼻竅ト一ツニ成テ治療施サン者ニハ海綿或「コロップ」ヲ適宜ニ作リ金（ゴード）或銀（シルフル）ニテ小頭蓋ヲ附ケ口中ヨリ其穴ニ挿テ置ハ壅塞ノ声韻ニ妨害ナキナリ○其悪症ノ者ハ内外ヨリ「レキユーター」樟脳ヲ用ヘシユカ「カシグル」幕ニ見ヘタリ

第九章「スフロフ」口中潰瘍　鵞口瘡

此症ハ白色ナル細小ノ潰瘍ヲ了殊ニ小児舌頬内面唇咽ニ能ク発スル者ナリ〇又一症大ク壊血様ニ腐敗メ侵蝕スル者アリ　此ヲ「ワートルカンクル」潰瘍ト云　水癌ノ義ナリ

此治療其小潰瘍ノ者ハ唇中剤ノ含剤ニ薔薇蜜及ヒノ白丹礬（ウイッテヒツトリヨール）ヲ加ヘ共片ハ容易ニ治ルナリ或ハ又明礬水ニ薔薇蜜ヲ加テ含レムルモ亦宜トス〇其ハ「ワートルカンクル」潰瘍ニハ薔薇蜜ニ海塩精ヲ少シ加ヘ附貼シ且ツ鮮皮（キナ）ヲ内服セシムル片ハ容易ク治スル者ナリ

鮮皮所謂鮮熱皮ニメキナくナリ

第十二章頸潰瘍　瘰癧

此症ハ即チ瘰癧ノ膿潰シタル者ヲ云

此治療ハ内服ニ「ミキユーダル」或ハ鮮皮或ハ海潮ヲ共ヘ外用ニハ造膿剤ニ樟脳ヲ加テ附貼スル片ハ治ヲ得ナリ

第十一章胸瘻

此症ハ胸内ノ空隙ニ通徹スル処ノ肋骨間ノ

瘻ニシテ肺藏ノ膿潰シタルヨリ起發スル
者ナリ
此治療ハ瘻ノ常法ニ異ナルヿナシ然𪜈自
然ノ良能ニシテ已ニ肺病ヲ治セシトスルノ勢
有ニ非レハ假令外部ヨリ治療ヲ施スト雖𪜈
治不可ノ症ナリ○其腹部ニ在ル瘻モ亦此ニ
同シキ者ナリ

第十二章　乳潰瘍

此症ハ乳ニ發起スル者ニシテ而尋常ノ者ト
「カシグル」様ノ者ト二症アリ○此兩症共ニ頑硬
アリ
此治療尋常ノ者ニハ緩和劑ニ「レキユーター」樟腦
ヲ加ヘ外附スル時ハ治スルヿヲ得
其「カシクル」様ノ者ニハ内外ヨリ「レキユーター」ヲ
用ヒ試ヘシ若シ此ニ由テ功無キ時ハ唯自然ニ任ス
ヘシ即其ハ患所ニ乾撒糸或鉛製ノ革或其他
柔和ナル清涼劑等ヲ施シ傳纒スヘシ或乳ヲ切
去ルヲ宜トスル者アレ𪜈多ハ功ヲエサル者ナリ

ヲ兼ル

第十三章肛門瘻

此症ハ直腸内或肛門ノ外側ニ在ル者ナリ

而メ此症三種アリ

一　全キ者

二　不全外部ノ者

三　不全内部ノ者

其全キ者トハ瘻管ノ両端直腸ノ内面ト肛門ノ匝側トニ相穿貫メ内外ニ二穴アル者ヲ云フナリ

此ヲ知ニハ捕具或水銃術或外側ノ瘻穴ヨリ大便漏泄スル等ナリ

内部ニ全ク透徹セザル不外部漏ト云フ

其不全外部ノ者トハ唯肛門ノ外側ニ一穴アル者ニシ其ハ瘻カ直腸ヲ纏エル脂肪膜ニ至リ止テ直腸ノ内面ヘ未ダ穿貫セザル者ヲ云フ此ヲ知ルニハ捕具テ其瘻口ヨリ大便漏泄セズ或ハ捕具ニテ瘻管ヲ穿入スルニ直腸ノ内ニ通徹セザル等ナリ

其不全内部者トハ前症ニ反メ唯直腸ノ内面ニ一穴有テ其瘻瘀肛門ノ匝側ヲ纏ヘトシ脂肪様ニ至リ止テ肛門ノ外側未ダ穿貫

セサル者ヲ云也此ヲ知ニハ大便ヨリ膿ヲ雜ヘ下テ且ツ肛門外側ノ表皮其色赤ク或頑硬或腫アル等ナリ

治療其全者ニ於テハ両穴ヲ一同ニ肛門外ニ向テ切開ノ最モ宜キ術トスルナリ

其不全外部者ニ於テハ柔和ナル疏滌剤ヲ以テ灌射スヘシ若此術ニテ功ナキハ前症ノ治法ニ随テ剪裂術ヲ処セスンハ非ス

其不全内部ノ者ニ於テハ先外部ノ赤色ナル処ニ穴ヲ穿チ而後前症ノ治法ニ随テ開割術ヲ施スヘシ

第十四章　會陰瘻

此症ハ凡テ尿道或ハ膀胱ノ膿潰スルヨリ起ル者ニメ其瘻孔ヨリ小便ヲ漏泄スル者ナリ此瘻ニ於テハ膿及尿ノ漏泄スルヲ注意メ見スンハアラス

其尿道ノ膿潰ヨリノ起ル者ハ唯小便通利ノ時而已ニ膿及尿ヲ漏泄スル也

其膀胱ノ潰瘍ヨリ起ル者ハ平常絶ス膿
及尿ヲ漏泄スルナリ
又別ニ婦人産後ニ於テ膀胱ヨリ陰莢中
ニ穿貫スル瘻アリ此症ハ難治者也
此治療其尿道潰瘍ノ者ニハ小便通利ニ
臨テ「ホルカールレイ」或「カテーテル」ヲ挿ヘシ
其膀胱膿瘍ノ者ハ平常「ホルカールレイ」或
「カテーテル」挿置ヘキ也唯此術ハ些ノ異レ𪜈
其除ハ両症共少モ治療異ラサル也

其瘻口頑硬ナル時ハ「アンチモニーボートル」附貼シ
烊化スヘシ其瘀肉ヲ上ル時ハ金瘡水或樟
脳精ヲ附貼スヘシ
婦人ノ瘻ハ其出産後先ノ瘻ト成ルヿ
ヲ知テ速ニ「ホルカールレイ」ヲ膀胱ノ内ニ挿
シ置サル時ハ遂ニハ不治ノ者ト成ル
又其瘻ヨリ陰莢中ニ尿ノ漏泄スルヲ防
止センカ為ニ昔人已ニ発明セル押シ木綿様
ノ者ヲ陰莢中ニ挿入メ置ヘキ者ナリ

不冷吉外科書巻二終

外科新書巻三

遠西　雅骨弗斯不冷吉　撰著

西肥　永保吉雄權之助　譯述

腫瘍篇

第一章總論

腫瘍トハ人体ノ或部ニ逆理(テーゲンナチユールレイキ)メ腫起スル者ヲ云○倔峯メ是ヲ寒熱(コーデヘーテ)ニ区別スヘシ熱腫ハ必ス焮痛アル者ナリ寒腫ハ僅ノ焮痛モ

有ヿナシ〇腫瘍内ニ含畜醸熟スル液ノ
形性ニ随テ且区別スレハ則十八等
其一ハ焮痛腫（オントステーキングゲズウェル）
其ノ二 膿腫（エッテルゲズウェル）
其ノ三 豕痺（フルステルヒング）
其ノ四 碩硬腫（フルハルデ゛ゲズウェル）
其ノ五 水腫（ウワーテルゲズウェル）
其ノ六 血腫（ブルードゲズウェル）
其ノ七 嚢腫（ベールス）
其八 肉腫（フリーセ）
其九 骨腫（ベーン）
其ノ十 関節腫（ゲウェリクテン）
其ノ十一 土様腫（アールドアンチヘ）
其ノ十二 空腫（リユクト）
其ノ十三 唾腫（スペーキセル）
其ノ十四 胆汁腫（ゲール）
其ノ十五 乳汁腫（ソーグ）
其十六 尿裂腫（ピス）

其十七　不真破裂

其十八　體器腫ナリ

第一篇　焮痛腫

第一章　總論

凡テ焮痛ヨリ起原セル所ノ腫ヲ焮痛腫ト名ク〇焮痛ハ下條四ノ顯症ニテ會得スヘし

一　赤色（ローデヘイド）

二　疼痛（ペイン）

三　焮痛熱（ヒット）

四　焮腫部ノ腫脹

此腫ノ近因ハ猶未タ全ク発明セサル如し然ニ「デールハーヒ」君ノ曰此近因ハ動脈細支末ノ閉塞トス可ナリ今世ニ説者謂ラク畢竟動脈ニ腫起脹スルカ故ナリ其ノ尤モ近因ナルハ是ニ蔓延スル動脈ニアル神経ヲ刺戟スルカ故ナリ神経ノ此焮痛ヲ発起スル処ノ刺戟ハ内外

二区別スヘし神経挫傷。金創。火傷寒骨損傷
脱臼発疱等七種尽ク外因ニ属ス
癥毒壊血病梅瘡膿汁様コッテ腐敗様ノ
如キ辛辣ナル者皆人体ノ諸部ニ溜着ス此ヲ
内因ニ属ス。此焮痛メ已後所為四種アリ
一 ヲップロッシンフ 則訳融解
二 膿潰
三 硬結
四 灰痺

ヲップロッシンフ融解スル片ハ焮痛ノ視的トナル
腫形カ漸次ニ減少スルヲ以テ速ニ察知ル之
硬結ハ焮痛部分ノ腫脹及ヒッカリスルコカ
増長シ他ノ赤色疼痛焮熱三徴カ消滅
スル片ハ医察知スヘし
灰痺スルトハ諸顕症時ヲ移之ニ従テ悪ク
ナリ熱カ寒ニ変シ疼痛カ不觸知ニ変シ
赤色カ鉛色ニ変シ張腫カ軟脆ニ変スル
ヲ以テ医前ヱ以テ灰痺ニ至ルコヲ知

此治療ハ其因ト成刺戟ヲ烊解セシメ以テ除キ去ヲ要ナリトス此ヲ為ニハ

一 刺絡(アッテルラーチング)スヘシ

二 清凉ノ疏滌剤

三 烊解スル処ノ諸引革外部ヨリ起因スル処ノ焮痛ニ於テ功ヲ奏ル処ニカハ

一 「ヲキシカラア」ト

二 水ヲ混(アルゲニダト)タル葡萄(ウエイン)酒

三 水ヲ和メ等分ニシタル焼酒(ウエニゲースト)

四 醴葡萄酒ノ元ニ（此字未解 昌斎原書按ニ wijn moer）

五 金炉糟水

六 水ヲ和シタル「ゴウラルト」ト名ク

七 分解スル処ノ諸菓草ニ煎汁

八 大麦(ゴルトバッツ)糊剤乳汁ヲ加ヘタル者

内部ヨリ起ル処ノ焮痛ハ乾メ敷革カ甚功アリト云

一 分解スル「メイレ」三（穀菜ノ諸粉ナリ）

二 分解スル草ノ散

第三章各箇ノ焮熱ノ腫瘍

体ノ上面諸部ニ発起スルヲ「アルゲメイン」總症ト名ク只一部分或処ニ限テ生スルヲ「ベイリソンデル」一箇症ト名ク其總症ナル者ハ即

一 焮痛瘍腫

二 「ブルードビヱ」血斑

三 ロース

四 火傷

五 「ホルストボイレヱ」

六 「ペストボイル」

一個ノ症ハ

一 眼焮痛

二 咽喉焮痛

三 歯齦焮痛腫

四 耳朧焮痛

五 乳焮痛

六 睪丸焮痛

七 前皮焮痛 和蘭人常ニ包茎ヲ前皮ト云即チ亀頭輪状ノ突起ノ後部小縮セル皮ナリ

八　亀頭焮痛

九　合縫キリーん焮熱痛

十　焮痛瘭疽

第四章　焮痛ヲ兼ル腫

凡テ脂膜ノ焮痛ニテ鶏卵ヨリ太クナルヿ無ヲ焮痛瘡腫ト名ル若此症内部ヨリ起ルトキ堅子七日メ膿潰スヘシ

此治法ハ膿潰ヲ催進スル処ノ緩和スル硬膏及蓋革要ナリトス又此腫ノ如キ人体ノ一部ト全ク不残蔓腫スル此ヲ焮腫様ノ腫ト名ク○若外部ヨリ起因スルトキハ常ニ烊解シ易シ此治ハ刺絡及烊解スル薬一華ヲ甚要ナカトス

第五章　血斑

此ハ上皮焮痛瘡腫ニメ鶏卵ヨリ大ナル者ハナレ○此ハ消散スルヿ甚タ希メ都テ膿潰スル者ナリ

此治法ハ柔和ナル糊剤及膏蜜煉剤此患ニ

發シテ一メ良業ナリ若シ是カ破裂スル𬼀ハ
彩多ノ小穴開穿シ夫ヨリ血様ノ物カ満
テヲル者ナリ

第六章「ロース」

血風瘡 此症ニハ野菊花ヲ帛ニ包ミアタヽメアトラ

此ハ上皮ノ焮痛ニメ胆汁様ノ「ゴケルプ」ヨリ
發起スル者ト思議ス此「ロース」ナル物ハ平ニ
メ廣ク而少赤色ニメ腫起ス此ヲ指ヲ以テ
押𬼀ハ白クナルヲ以テ「ロース」タルヿヲ知ヘし
而多クハ熱後ニ起者也

此治法ハ外部ヨリハ散シ乾ス処ノ數葉及
刺絡ヲ以テ為ヘし
内部ニハ清涼ナル疏滌剤及接骨木花硝
石ヲ混和セル亜剤ヲ飲服セしムヘし
脂及膏様者及流剤此「ロース」ニ甚害アリ
何者脂及膏様ノ者ハ「ロース」ヲメ悪症ノ
潰瘍及「フルステルヒンク」死痺ニ変セしムル物ナル
カ故ニ反流剤ハ「ロース」毒ヲ内藏ヘ内陥セし
ム○内陥しタル「ロース」ニ須ク疏滌剤ヲ飲服

セシメ而甘酉（ミユールラーフ）及柔ナル発泡膏ヲ以前ノ患
所ニ貼ス陥毒ヲメ外部ニ導輸スヘシ〇時ト
メ焮痛及水泡カ傍起スル者ナリ又壊血
様ノ人ニ於テハ死痺ノ種類ヲ傍起ス〇此
諸症ニ於テモ單「ローズ」ノ如ク治療セスンハア
ラス然レモ壊血病ノ人ニ有テ死痺スルヿ非
ス「テイナミ」山（ベルグ）出ノ「ミユーレミ」ヲ混スル者適（昌齊按ニ酸模也）
宜當ノ剤ナリ

第七章 火傷

此症ハ火及火カヲ以テ起ス処ノ焮痛有モノ之
〇火傷ハ焮痛ノ腫属ニメ火或火カヨリ起
発ス是則焮痛ノ徵ト前條ニ記載スル
処ノ徵トヲ以テ察知スヘシ〇此ハ已ニ誤テ
成タル処ノ因及焮痛ノ標的ニテ證知スルヿ
能フ是ニ四種アリ

一 上面ノ者（是則赤班或僅少ノ水泡有之）

二 膿潰スル者（脂肪膜内ニ通徹メ膿潰スル者）

三 焦脱疽様ノ物（即皮ノ死痺スル者）

四　寒ニ脱疽様ノ物即内部ヨリ骨部ニ至ル治

死瘁スルナリ

此治法ハ第一ノ者ハ冷水或「ヲクシカラート」或焼酒ニ水ヲ和シタル者。又「ゴーラルド」ニ水ヲ和シタル者ヲヌリテ漫延スヘカラシム。而後水色ヲ破潰メ後「ミテリフト」膏ニ金炉粕極末及白垩炉眼石ヲ加ヘ貼スレハ治

第二ノ者ハ柔和ニスル剤ヲ軟膏トナシ或柔和ニスル蒸苐或糊剤トナシ貼ス

内部ニハ清涼剤ヲ与フヘシ

第三ノ者ノ内薬ニハ規那皮ヲ用ヒ外様ハ香竄「ハップ」ニ而「テレペテイン」ニ精ニテ洗フ要法ナリ

第四ノ者ハ不治ナリ若其患所ノ便宜ニ随テ切断スヘキコトヲ看得セハ勉励メ試ミハアルヘカラス

第八章「ホルストボイル」

此寒ヨリ起ル因スル欣痛アル上皮ノ核粒ナリ此ハ手足指凡テ発ス〇此形象ハ赤色

光沢アリテ亦痒ク経久ノ硬腫スル者ナリ
此症ニ於テハ温剤ハ甚タ避ケ忌ムヘシ如何
トナレハ其ハヲシテ容易ク灰痒ニ変セシムレハ
此初発ニ於テ医寒水(コーテワアトル)及雪(スネーユー)ヲ貼シ而後ニ和
ナル脂肪(ヘット)ニ「テレヘンテイン」ヲ混シ或焼酒「ゴーラルド」
ヲ烊解シテ塗スヘシ〇間々膿潰ニ変化スル而
已ナラス或灰痒スルモノナリ〇膿潰ニ移
ルモノハ内部ニハ熱皮外部ニハ香竄ノ糊剤
樟脳ヲ混ルモ良ナリ

第九章 疫(ペスト)「ボイル」 疫ハ流行病

是ハ一個ノ疫毒ヨリ起因スル頑剛ナル焮
痛腫ナリ〇此ハ疫厉流行ノ歳運ニ由テ
察知スルヿ能フ此「ボイレ」ハ大概腹。腋下。
耳「キリール」。ニ発シテ然レモ猶且他部ニ発ルヿ
アリ
此治法ハ必ス消散スヘカラス消散ヲセシメシ
トスル直ニ患者ヲシテ鬼録ニ上ラシムル程ノ
変症ヲ発ス唯此良法ハ勉テ膿熟セシメ

而腐蝕剤ヲ以テ瘡腫ヲ〆誘導破潰セシム
ヘシ○内薬ニハ「ルーター」酢ニ橙皮及ヒ樟脳ヲ
混和〆飲服スヘシ

第十章 咽喉焮痛

此症ハ人能知リ易キ者ニ〆自然ト著キ
処ノ咽喉焮痛ハ形象飲食嚥下スルヿ不
利及熱ヲ以テ診定スヘシ○此ヲ区別スルハ
隠伏シタル者ト現発スル者トナリ
其現発スル者ハ咽。巴旦杏。懸壅。上顎内ニ発
出ス
其隠伏スル者ハ凡テ気喉頭食咽頭ニ発ス
将ニ絶ントスル艱嶮ナル呼吸飲食下リ難ク
及音声反テ清澄スルヲ以テ診定スヘシ
此ハ現発スル者ハ隠伏スル者ヨリ危ヿ少
ク隠伏スル者ノ如キハ上ノ症ヨリハ危ク
動モスレハ死ニ至
此治法ハ両症ニ先ツ解散セシムヘシ其法
其ハ一 再次刺絡

其二　清涼ナル疏滌剤

其三　外部ヨリ緩和メ及刺戟スル処ノ
糊剤ヲ与ヘシ即其方
白芥子(モストルトサード)　荏子　乳汁　伯夫藍

其四分解スル処ノ嗽液ヲ銃射スルカ或患者
ヲメロニ嗽シムヘシ

其五「キリステル」ヲ行ヘシ其灌腸剤塩ヲ交
ヘ入用ユ
則其含剤方ハ

一「ヲクシレカーラート」接骨木(フリール)花(ブルーム)又赤(ロート)薔薇(ローサ)「プロ
テルニ」ヲ稀並汁ニ交ク消石薔薇蜜ヲ加ヘ
タル者

三　白水或銀炒硝水

三「カニクル」精及薔薇蜜ニ六倍ノ水ヲ以テ和タ
ル者

若シ病勢此等剤ニテ切ナク通息催進ノ
危殆ナル時ハ医須ク奮カメ直ニ気管ヲ穿
開セスニハ有ラス若シ此患ヲ朦償タル時ハ

須ク只單ニ緩和スル処ノ草根及穉ノ煎汁
ヲ嗽含剤トナシテ用ヘし其方乳汁緩和
ニスル薬草及棉薬ヲ加テ煮洪用ス
咽喉ノ部分ニ膿腫ヲ発し患者多ク速ニ息
絶セレメントスル时ハ医須ク伏披針ヲ以テ
破開セジハ非ス
炎痒ノ係ヱル咽喉焮痛ハ内部ヨリ熱皮
樟脳ヲ以内服セシメ而同上ノ薬ノ水或葡
萄酒ニテ煮テし嗽灌トメ与ヘし。若焮痛カ

巴旦杏(アマニテレン)ノ硬サニ移ル时ハ医須ク内部ニ「こキ
ユータ」外部ニハ「こ圭ータ」ノ剤及棉ヲ
乳汁ニテ煎タル蒸薬嗽嚴ヲ与ヘし 下章
ニテ咽喉焮痛種々ノ変アルヿ人見ヿ能ツ
一　焮痛
二　膿腫
三　熱脱疽(ヘーテヒユル)
四　硬结
梅毒ノ咽喉痛ニハ医須ク内部ヨリノ彼此ノ

水銀剤ト水煎剤（ホツトタランキ）トヲ用ヒ外部ニハ大麦煎汁ニ二三「デレイニ」ノ甘汞薔薇蜜ヲ加ヘタル嗽薬ヲ用ベし

第十一章 歯齦痛腫

此症ハ腐敗歯ヨリ多ク発起ス○此初ニ於テ医接骨木花ト「アントリル」ノ薄キ煎汁ニテ含嗽スルコトニテ消散ヲ試ムベし 若此方ニテ廿四時内ニ（日本十二時ナリ）次し功モ見レザル件ハ須ク乳汁ニテ煎ジタル柿ノ汁又ハ直ニ柿ヲ両断ト為し患所ニ貼メ膿潰メ腫形十分ニ高起スル件ハ直鈹針ニテ破開し而其近辺ニ残タル潰ニ白葡桃酒或硫水薬及薔薇蜜ヲ以テノ瘡着セしムベし○腐敗歯ハ膿潰ノ形状カ只許スナラハ速ニ歯ヲ除カスニハ有ラス若此術ヲ怠慢スル件ハ治養難キノミナラス或不治ニ至ル

第十二章 耳腺（キリール）之焮痛

此ハ常ニ解散セしメ治ル此由テ前条属

屢著述スル消散剤ニテ治ルヿ能フ○然ドモ
熱ヘ病ニ於テ熱ノ分子カ盤居メ発スル処ノ
此患者ハ速ニ膿潰ヲ催進スル処ノ薬剤ヲ
與ヘ而既ニ膿熟ヘスル时ハ須ク「ヘルセンステーン」
地獄石ヲ以テ破血スヘシ○就中此種類ノ腫瘍ヲ
消散スル时ハ屢ニ甚タ危殆ナルヿヲ発起ス

第十三章乳焮痛

此ハ必産婦ニ多ク又所在ハ
一 上皮
二 脂肪膜
三 乳根

第一ノ者「ローズ」ノ標疽ニテ他ノ二物ト別ナルヿヲ知ルヘシ
第二ノ者焮痛ノ添タル瘡腫ノ諸徴ニテ知ルヿヲ得
第三ノ者乳根内深ク盤居スル処カ熱ヘメ痛アリ及頑固ナル塊ニテ知ルヿ能フ
此部ノ「ローズ」様ノ焮痛ハ解散剤ニテ容易

シ治スルヿ能ハ〇此部ニ及テ脂肪膜焮痛ハ膿
潰ニ進ミ易ク而乳根ノ焮痛ハ須ク剛ニ変ス
ルモノナリ

治法ハ焮痛ノ諸腫瘍ハ初発ニ於テ烊解ヲ
催進スヘシ其烊解者ハ

一　刺絡スヘシ

二　腹瀉剤ヲ与ヘシ

三　乾燥メ分解スル散薬

四　同上蒸薬

若シ此等剤功無キハ勉メ諸法ノ膿潰剤ヲ
施スヘシ〇乳ヲノム小児アル婦人ニ於テハ
乳劇ク盈満スル時ハ須ク其盈満ヲ疏滌ス
ヘシ其法

一　吸乳児

二　吸硝子

三　歯ノ未生ノ犬（ポニート）

四　淡薄ナル食物

五　柔和ナル疏滌剤

昌齋曰淋疾閉塞ヨリ発スル諸症ニハ「アラシ吐又接淋法ヲ施シテ大ニ奇効アリト「ワッセンベルヒ」曰此法ハ「ヒルセ」ヲ以テ始トス接淋法ハ先蝋線子ヲ悪性淋疾ヲ患ル人ノ尿道中ニ挿置ヿ二三時淋疾毒ヲ浸染スルヲ要トス乃チ取出シ直ニ淋疾閉塞ヨリ発スル患者ノ尿道中ニ送挿シ留止ヿ二三時患者則チ尿道焮衝シ淋疾諸症ヲ発来ル始トス是其法ナリ

第十四章 睾丸焮痛

此ハ陰嚢中ニ含包スル処ノ焮痛スル多少ノ硬腫ニテ知ルヿ能ク○時トメハ是患ハ挫傷スルヨリ発ス然圧多ハ淋疾ヲ甚速ニ閉止タルヨリ発ナリ

此治法ハ諸焮痛ニ甚良キ瀉路トナル烊解ノ始○ニテ勉強シテ其功ヲ終スニハアラス其剤ハ

一 刺絡

二 清涼ナル腹瀉剤

三 若シ此症梅瘡ヨリ発来スト云ヿヲ認得ハ「ゴムクイツキ」ト「サアトメルキ」仁乳緩和ナル梅仁乳トヲ共ヘシ

四 緩和ニシテ分解セシムル薬ヲ

五 陰嚢ヲ帯ニ攬鼻覗ヲ以テ抱持スヘシ

「ワッセンベルヒ」曰小児及成童者間票受ニ由テ前皮狭窄ヲ為シ尿物其間ニ滞リテ遂ニ焮腫ヲ発シ膿様液ヲ流出スル者アリ然レ圧梅毒ニ非ス故ニ斯ル者ハ金錫水ニテ洗浄スル片ハ容易ク治ス此症大人モ又患ルアリ

第十五章 前皮焮痛 亀頭前皮也或包皮ト云

前皮ノ焮痛ハ前皮狭窄スル物ナリ是症多クハ毒瘡ヨリ発ス此焮痛ヲ烊解スル要方ハ

一 刺絡

二　疏解剤

三　清涼ニスル仁乳

四　乳汁ニ「ゴムクイワキ」ヲ混和メ患処ヲ洗フ時ハ焮解ス若シ此方ニテ焮解セス而メ亀頭ニ下疳ヲ患ヘ又脱疽ニ変移スル時ハ如是方法ヲ以テスヘシ即チ

五　陰茎皮ノワキヲ切リ上ル時ハ治スヘシ

第十六章亀頭焮痛

此症ハ亀頭カ焮痛ニテ腫脹シ前部カ後部ニ反ル押メ「スパーンセ。カラーフ」ト名クル処ノ毒症ヲ発ス

「スパーンセカラーグ」ノ症発ル時トメ亀頭皮ヲ無理ニ押反スルヨリ起リ而焮痛ニ関係スルヿナキヿアリモノ焮痛ニ関係セサル時ハ須ク指ヲ以テ亀頭皮ヲ前ヘ撫テ戻スヿ決テ怠ルヘカラス

治法亀頭焮痛ハ毎度梅毒傳染ニ関係メ発起ス○此症ニ於テハ刺絡水銀剤ヲ混

シタル乳汁ノ苐ニテ患処ヲ洗ヒ而メ前ノ方ヘ指ニテノ亀頭皮ヲ撫テ戻スヘシ○或無理ナル因ニ羅ル亀頭無理ニ押反スル症ハ前條方中ノ水銀ヲ去リ用ヒ而解散セシムル蒸剤糊剤ヲ施スヘシ○若シ怠テ前皮ヲ逆押劇クナル片ハ前皮ヲ竪ニ切断スヘシ然ラサレハ亀頭双痒スルニ至ル者ナリ

第十七章便毒

此症ハ焮痛或梅瘡毒傳染ヨリ常ニ起因スル処ノ焮痛腫ナリ○此ハ合縫疝ト見別テ難シ。見テ知ルニハ一ニハ便毒ハ合縫疝ノ如ク内部ニ藏ムヘカラヌ二ニハ嘔吐(ブラーク)腹痛(ビユイキペイン)硬屎其他明著ナル片キレム疝症ノ如クノ傍症アラザルヲ以テ知ル

治方ハ尋常ノ便毒ハ他ノ焮痛腫ノ如ク初発ニ療セスンハ有ラヌ譬ハ解散剤ヲ先ヅ用功ナキ片ハ速ニ膿潰セシムヘシ。或熱病ニ起ル処ノ熱分子ノ瀦留スルヨリ発ル此患ハ須ク

膿潰スヘキヲ看得セハ勉テ膿潰セ令ムヘシ
此由テ消散剤ハ此患ニ於テ甚害アリトス
是ニ反メ膿潰剤甚秀タル要方ナリ〇若シ
此症ニ梅毒カ関係セハ勉強メ解散セシムヘシ
内部ハ初発ニ数度疏滌剤ニ水銀ヲ加用メ
而後一日ニ両度ツヽ「ゲレイン」ノ「ゴムクイツキ」或他
ノ水銀剤（シイツキミツテル）適宜ノ分量ヲ「ホウトダランキ」ヲ以テ
送下ス又「スウトスランキ」以テセルモ佳ナリ外
部ニハ終リニ於テ水銀ヲ混タル「キツキホルフ」

膏其他ノ種々ノ水銀膏（シイツキサルフ）消散スル諸第ノ
「ハツプ」ヲ彼所謂白水（ウヲイテワートル）ニ蘸タル者要用ナリ
〇此ヲ消散スルヿ能ワスメ而瘡ヲ膿潰ニ移
ルハ須ク膿潰剤ヲ患処ニ貼メ而膿熟セハ
或「ヘイトステヘレ」以ニテ破開スヘシ

第十八章 標疽

此ハ指頭乾痛スル悪症ノ焮痛シ足指ハ手指
ヨリ稀ナリトス此焮痛ノ所在ハ

一 皮及脂肪膜

二　筋根莢

三　骨膜

四　爪下ノ公ト云様ノ実体

第一ノ者甚顕著ナル腫脹ナリ

第二ノ第一ノ者ヨリ著シカラサル処ノ腫脹ナリ併シ鋭利ナル射マテ蔓延スル者之

第三者顕シ難キ腫ニメ尤深ク其ハ酷厉九者カ腕下ニ波及ス

第四者多ハ疼痛カ爪ノ周圍ニカキリテ

爪根ニ白膿様ノ班及其部ニ水泡ヲ発シ膿様ノ液カ充満スルモノナリ

此治法第一者ハ危カラス○第二ノ者毎度掌ニ至ル迄蔓延スル処ノ膿窠ヲ起ス○第三者ハ凡腐骨ヲ起原ス○第四者ハ逆ニ爪ヲ脱出ス○都テ指頭ノ焮痛ハ初発ニ治スルヲ佳トス即○一患者尺沢ニテ出血○第二ハ指頭ヲ温メンカ為ニ白氷ノ内ニ蒸浴シ又焼酒精ニ水ヲ入和ケタル液ニテ蒸浴○試

消散スル草(コロイド)ノ煎汁ニテ蒸浴ス○若シ焮痛
此方ノ防禦ニテ十二時(本邦刻)餘モ病勢衰ヘ
ス或尚増劇メ膿潰ニ変スルトキハ此ノ旨ニ
臨テ医速ニ切開ナリ或猶十二時ノ間モ
緩和スル「パップ」ヲ用テ開割スルヿヲ断ス
ベシ○其術ヲ施ス所在ハ初発ニ痛シ初ル
部分ヲ常例ノ如クニ指立縦横ニ準メ施ス
ベシ○若シ膿窠カ筋根莢或脂肪膜内ニ
アルトキハ須クミゾサクリヲ以テ切開キ而后

「バルサム」ノ液ヲ貼メ纏傳スベシ○蒸浴法ハ
葡萄茎ノ灰汁カ此症尤奇功アリ○又若
此患ニ懸ル指ノ「コーノチース」(小骨ナリ)カ骨疽ニナル
トキハ須ク乳香精或散ヲ以テ療スベシ○其
腐タル「コーノチース」ヲ「タンフチイル」(張毛)ヲ以テ
除ク能フ若シ此術ヲ施ストキハ猶速ニ治ス
○若腐爪カ自然ト離脱セサルトキハ医須ク
日々ニユルミタル爪ノ下部ニ細キ乾タルホツシ
ヲ挿シ其部ヲ断々ニ離距セシムベシ或全

爪ヲ一度ニ除クモ佳。然レ圧無理ニ爲ス不可
トス実ニ爪久ク爲レザル時ハ膿腫ノ治療ス
ヘカラズ

第二篇膿腫部

第一章膿腫總論

此ハ膿様ノ液ノ自然ト内ニ釀畜スル処ノ腫
ヲ膿腫ト名ク此ニ屬スル種ハ

一 膿腫
二 膿ノ瀦留
三 胸膿（ボツトルボルスト）

第二章膿腫

常ニ脂肪膿腫ハ多ク焮痛ヨリ續キ起者
ナリ○焮痛カ膿潰ニ移ントスル症候ハ前ニ
記ス処ノ焮痛ノ四症カ漸々ニ増劇スルナリ
○既ニ膿熟スル処ノ腫ハ焮痛腫ノ中迨カ白
ク柔ニ〆痛マス高起スルトカブノ波及スルト

及焮痛ノ四徴カ漸次ニ消散スルトヲ以テ按定スヘシ○焮痛カ膿潰ニ移ルヿヲ按定スル片ハ速ニ下条ニ記ス処ノ療術ヲ処スヘシ

一 緩和スル傳菓中ニ「アシフラストリユム テヤキロシユムキユムス」膏ニ常ノ大麦ノ糊剤ニ蜜ヲ混シタル者殊ニ秀タル方トス

二 刺戟メ緩和スル処ノ方中ニ甘酒及灰中ニ燒(ケブラード)タル葱根等ヲ上條ニ記ス処ノ「パップ」ニ混和スルヿ甚要方ナリ。若シ腫瘍中ニ膿カ著キ波波(ガブく)ヲ以テ顕ル程ニ巨大(ゴロヲト)ナル片ハ医須ク其ハ腫瘍ノ皮ノ薄キ部分ヲ斗テ小刀(ソスナー)或ハ腐蝕石(ラピスイニベリナリス)ヲ以テ開発スニハアラヌ開(穴)後勉強メ内ニ畜醸スル膿ノ清除シ其后其ハ周囲ノ硬塊ヲ鮮解スル迄ニ緩和スル蒸菓ヲ施シ而常例ノ膿腫ヲ療スル如ク上ニ書シタル方ニテ全治スヘシ

「キリール」ノ焮痛ハ漸次ニ膿潰シ難トス此症ニ

於テ須ク緩和剤ニ甚刺戟ノ消散スル処
ノ物ヲ加テ附着シ而メ連ニ此ヲ開究スルヿ
勿レ○此ノ如キ腫瘍ノ種類ニ於テハ大芥
荏子末及砕タル芥子ニテ製タル糊剤要方
トス

第三章 膿瀦留腫

此症ハ既ニ焮痛ノ患ニナルニ遽然トメ一部
分ニ瀦留スルモノヲ瀦留膿。及胸隔膜。ト
唱フ○此患ハ慢性病ニテ膿或膿様ノ液カ

血ト共ニ循行シ自然ニテ脂肪膜ノ彼是
ノ部分ニ輸出セラレタルヨリ生スル者ナリ
○膿ノ瀦留スル部分ハ常ニ耳腔射節膝
等ナリ○此ハ一昼一夜或ニ昼夜間モ既
ニ着キ液波アツテ口ヲ穿開ルトキハ甚過
多ナル膿ヲ保チ居ル処ノ膿腫ノ顕レ物ニ
ニ知ヘシ

此治術方ハ消散スレハ常ニ危殆ナル傷症ヲ
発起スル故ニ医須ク是ヲ試ムヘカラス只ハ

液波ヲ肯定セハ速ニ小刀或腐蝕石ヲ以テ
開穴メ而後他ノ膿腫ノ療方ヲ以テ施スヘシ

第四章 胸膿

此ハ胸腔内ニ膿ヲ瀦溜及溢出スル者ナリ
是区別スレハ
一 外部ノ物 是則肋骨ノ間膿腫アルヲ云
二 内部ノ物 是ハ胸腔ノ間ニ膿ノ瀦溜スルモノヲ云
第一ノ物ノ症候ニ諸他ノ膿腫ノ症候ト異
ナラス

第二ノ者ハ以前患タル肺焮痛或脇痛ノ徴
ニテ知ルヘシ○若患者健固ナル者ヲノ下ニ
テ寝ル時ハ呼吸迫息持重セル懊悪寒及
赤キ「コー子ヒ」或胸ニ於テ重キヿヲ覚ヘ
胸温ナルヿヲ覚ヘト雖モ其ハ胸ヨリ吐出
スル水ハ寒冷ナルヲ以テ知ルヘシ○治方ハ
瀦膿潰ヨリ発ル処ノ諸症ハ甚難治トス
殊ニ膿ヲ出シ膿潰ヲ清潔ニスルヿ肝要
ナリ即内部諸ニハ患者及疾病ノ條ニ符合

スルヲ以テ処スヘシ外部胸膿ハ膿ヲ泄除スル為ニ針ヲ刺ヘキ処部ハ腫形ヲ以テ著ク知ヘシ○是ニ反テ内部胸膿ハ須ク所謂胸穴ノ手術篇ニ示ス所ノ法ニ随テ作ルヘシ

第三篇　死痺内部

第一章　死痺内總論

此ハ身体ノ或部分或一部分或過半部分カ腐敗スル者ノ死痺ト名ク此ヲ区別スレハ

一　始メノ物
二　全キ物（注下条ニ有）
三　湿死痺
四　乾死痺

○始ノ物ヲ熱脱疽（ヒユーテヘーニル）ト名ク即總テ上皮ノ腐敗スル者ナリ○全キ物ヲ寒脱疽（コーテヘーニル）ト名ク是即柔軟ノ部分カ骨ニ至ル迄腐敗カ

蔓延スルモノナリ〇湿死痺ハ其部ニメ温緩及固渋カ猶存セル者ナリ〇是ニ反テ乾死痺ハ其部ヲ乾燥メ頑固トナル者也

第二章湿死痺

此ハ焮痛ヨリ續キ起ル者ニメ已ニ証メル処ノ焮痛ノ四症カ漸次ニ増益スル時ハ遂ニ此患ヲ将来ス已ニ今患処ノ此腫ノ死痺ハ後條ヲ照メ察知スヘシ即

一 疼痛カ麻痺ニ變シ

二 熱カ寒冷ニ變シ

三 赤色カ鉛色ニ變シ

四 腔脹カ柔脆ニ變シ

五 大水泡ニテ上皮隨起ナ其ハ内ニ黄ハ色ノ腐敗水有モノ〇此ノ近因ハ液カ諸骨中ニ溜止シ其ハヨリ諸液カ腐敗メ発起ス一腐敗ヲ極根シ二已ニ腐敗シタル部ヲ堅固ナル部ヨリ引留ス〇此ハ腐敗ヲ止ル処ノ剤キナ皮及樟脳ヲ混シ内外ヨリ与フ甚良シ

○内部ハ辟言ハ毎時幾那皮一戔「カンプル」ナ七イニヲ
飲服セシムヘシ○外部ニハ須ク其部分ヲ生
部分ニ至迄切刀痕ヲ造リ
一　其間ニ幾那皮「カンフル」「ウヱインロイト」芸香三品
ノ極末ヲフリカクヘシ
二　或「テレペンテイン」精ニテ其刀痕ヲ洗
滌ニスヘシ
三　刺戟スル香草「パップ」又焼酒ニ「サルアルモ
ニヤツク」精ヲ混和シタル液ニテ不絶湿タル

綿布ヲ以テ掩スヘシ○既ニ死痒スル肉ヲ未
タ死セサル肉ヨリ割断スルヿハ自然的ニ
テ死痒セル肉ノ端ニテ膿潰セシムル革剤
而已ニテ成ル○此始ノ症ノ種カ全キ死
痒ニ移ル時ハ○此標的ハ医骨ニ至迄剪カ
リ或穿テモ痛ミナキニテ知ヘシ死痒ノ
進行タヲ局定セシカ為ニ上ノ記スル革剤
ヲ施スヘシ然圧只其ハ腐敗ノ骨ヨリノ外ニ
何モ不残程ニ腐肉ヲ全ク割キ除ヿヲ得

ハ須ク肉ノ切キワノウヘ上部今内部ヘ翻タル
皮ノ端ニ於テ切断シ而生肉セシム〇肉固
ヨリ起発スル灰痒ハ總テ常ニ危篤ナル
物ナリ又コレヲ切断スルヿモ葉スヘシ

第三章 乾燥灰痒

身体ノ或部分以前疼痛ノ患モナク而メ
今知覚ヲ失ヒ厥冷メ黒色ニ変シ尚且
乾燥頑硬スル者ヲ乾灰痒ト名ク此因ハ
間々悪食物ヲ用テ續キ起ルト雖モ所謂

「ムーレルコーレ」ニヨリ起発スルモノナリ〇此治方
ハ内部ニハ「カンフル」外部ニ貼シ樟脳硬和剤ニ
テ酸救剤ヲ混和スルモノ「カンフル」焼酒ニ
少シノ「サルアルモニヤツク」ヲ和シタル者或独皮
ノ膿煎ハ此患ニ於テハ最モ的剤ナリ〇凡内
部ヨリ起因スル此種類ノ全灰痒ニ於テハ
切断功ナシ必企ヿ勿レ〇疼痛ノ傍「ヲールコールハ
一昼夜ノ間ニ灰痒ニ変スル者ナリ是ハ疫厉
流行ノ気運ニ方テ有者ニメ諸辰腐敗ス

ルヨリ発ス○治方ハ内部ニ「ウヱインシロイト」芸香侵タル酢ニ無皮樟脳ヲ加ヘ用フ○外部ニハ割剝シ散ニシタル樟脳及竜脳粘液ヲ加ヘ痕ニフリカクベシ

第四篇頑固腫部

第一章總論

此症ハ液凝固シ或「キリール」ノ形ニ變ヨリ発ス

一訳硬結腫

コレヲ頑硬腫ト名ク此ニ属スルモノハ

一　節核腫（シクヌースト）

二　蟹腫（カンケル）一名ケレノフト

三　核腺腫（コロップキリール）瘰癧カ

四　核腫（コロップ）

五　「コイプ」腫

第二章節核腫

此ハ頑固腫ニシテ「キリール」ニ発ス其始メ小ナリ而漸次ニ大クシ而自然ニ解散セスメ稍モス

レハ蟹腫(カンクル)ニ変ル物ナリ○此腫ノ標的ハ医顕然タル極症ヲ容易ニ区別スルヿ能スシテ是ハ知覚ナク及腫色一向変ルヿ無ヲ考照スル片ハ猶容易ニ知ルヿ能ス○此腫ノ発ル処ハ大概乳゜耳腺゜腋下゜合縫゜睾丸゜巴旦杏核゜及其ハ他餘ノ処ニ起発スル者○即此ヲ常ニ悪症゜善症゜全節核腫゜未全節核腫゜及焮痛水腫蟹腫様ノ物ニ区別スト雖此諸区別ハ医記得カ為ニ繁雑ノミナラス尚且ツ解シ

難シ此患ノ症法モ知リ難シト雖モ猶治方ニ於テハ皆一法ヲ以テ療スヘシ○此腫ハ分解シ難トスト雖モ膿潰ニハ曽テ至ヿナシ然モ屢ゝ悪症ニテ如何トモ書記スヘカラザル「カンクル」腫ニ変シ易○然モ分解剤ハ此症ニ害アリトス○此治方内部ニ大芥ノ濃煎汁ヲ朝夕毎服十「ガレイン」宛与フヘシ○外部ニハ大芥膏ヲ夜間ニ敗メ大芥「パップ」ヲ昼夜施スヘシ○諸ニ辛辣及脂肪剤ハ此症ニ於テハ

甚害アリ且ツ速ニ此腫ヲ〆蟹腫ト変セシ
ム○若腫全ク鮮和セハ外部ヨリ起原スル明
徴有ルトキハ医小刀ヲ取テ割出スヘシ○脂肪
膜内(ウチ)ニ有ル碩硬腫ハ屢間違テ「クスースト」
腫ト変セシム是即チ「キリール」中ニ有腫ヨリ
ハ當多ク分解スヘシ

第三章「ケレーフト」腫

此ハ「クスースト」腫カ僅ノ日月ヲ経テ後痛痒
有テ鉛色ニ〆更形ヲ変〆起ヲ「カンクル」腫ト名ク

○此近因諸液ノ辛辣トナリ而節核腫ヲ
受タル処ノ固形部ノ性ヲ変スル者ナリ○
此ノ「ケレーフト」腫ヲ区別スレハ
一　陰伏シタル者
二　破裂シタル者
陰伏シタル「カンクル」腫ハ及之外皮カ已ニロア
キタル者而我カ前ニ已ニ譯シタル如ク外皮
カ破裂スルトキハ則是之陰伏シタル者カ変
〆破潰ノ者トナルトキ全ク傳革以テ治ルコトナシ

此陰伏シタル「カンクル」腫ハ医所謂内外ヨリ大
芥ヲ以テ「タスースト」腫ノ如ク間々功ヲ得ルヿ
有リトテ猶自ラ試ルニ曽テ功ヲ得ルヿ
ナク且ツ他医ノ効ヲ奏スルヲ見ルヿナシ上ニ
載スル革剤ヲ以テ和カナル処ノ「カンクル」腫ハ
術ヲ施スニ害ナケレハ須ク除去スヘシ○且孕生
ノ形小モ無キ処ノ蠟腫ハヲペラーチトフルヒー
テン スルヿ能ク此様子ハ然モ術ヲ施メ害ア
ル者即此腫ノ近傍カ固着シ硬ク腫ノ周

囲廣ク蔓延シ此腫内因ニ関係且外景ノ附
着スル非常ノ形象及其悪キ形象カ患処ヲ
リハ尚多ク処々アリ○除去ルヘカラサル
「カンクル」腫ハ須ク補薬ヲ以テ療スヘシ即チ
其方ハ陰伏ナル者モ破潰スル者モ一般ナリ
陰伏スル者ハ即此四方カ要用ナリ

一　柔ナル疏滌剤ヲ持重メ用ルヿ

二　多血ノ人ナラテハ刺絡スヘシ

三　害ニナラザル様ニ腫ヲ覆ヘシ

恐クハ水字脱スカ

四 疼痛ヲ鎮止スル薬剤ヲ用ユヘシ

破潰ノ者ハ「リヌースト」腫ヨリ発スル「カニクル」様ノ膿腫ノ篇ニ於テ書載スル薬剤ヲ良トス殊ニ銀剤ヲ可ナリトス

第四章「コロツプキリール」腫

此ハ頸或下顎ノ下ノ多少ノ「キリール」カ固結スル者ヲ「コロツプキリール」腫ト名ク○此ハ硬クメ痛マス自然ニメ大小不極ノ腫ヲ草襍不脊ノ腫内ニ硬結スル者也○此近因ハ諸液一箇ノ辛辣ナル者ニ性ヲ変スル者ニメ此ヲ「コロツプキリール」状辛辣ト名ク○如此ノ辛裂液ハ只頸腫下顎腫ヲ固結スルノミナラス又耳腫腋下腫、合縫腫、肺腫、腸間腫ニ発ス○此辛裂液ハ眼瞼痛、労瘵、腹硬張「ライトローヒニク」瘦、瘡、骨疽、骨腐蝕、関節強直ノ患ヲ将来ス○此ヲ融解スルコハ殊ニ難トス而膿潰モ更又易カラス然レモ融解スルニハ内部ニハ大芥ニ熱皮ヲ加ヘ且ツ水銀剤ヲ共ヘシ

〇外部ヨリ大芥膏或大「パップ」ヲ貼スヘシ
〇此ニ因テ内部ハ下條ノ方カ甚称巻アリ
トス

一　硬キ灰汁塩

二　子チヤンセセイフ（国ノサホン）

三　潮

四　「セルトセル」水（鉄気有水ナリ）

五　樟脳

第五章「コロツプ」腫

凡此腫ハ甲様腺ノ長延ナル腫ナリノ此ニ因テ頸ノ前部ノ中央ニ発ス〇此起原ハ甲様腺ノ一箇ノ性ヲ変スル者ニシテ内ニ豚肉様或ハ土様ノ物ヲ含蓄充塞ス即「コロツプキリーヽ」腫トケ別アルヲ知ルヘシ。此患ハ「スウイツル」「テーヽル」ヒーモン組国其他「アルヒーセ」山辺ノ人ニ多発ス少壮人ニ於テ「コロツプ」散ヲ自重シテ用ユレハ敵シ治スルヿ能フ其方「コロツプ」散剤ノ方ナリ　甘汞　焼タル海綿「フルミルソウヒ」（水銀製ノ末也）

嵐婦ヲ以テ製スル散ナリ又焼タル卵殻硫
黄花○其患ニ於テ功上ノ方ニ譲ス○外部
ヨリ「ヱンプラーストリユムアトリユピヤム」ヲ附貼シ
煙草ナヲカーウヱンフ咬此患ニ甚功アリトス
此患ノ一種空「コロツプ」腫及水「コロツプ」腫ハ
下条ニ於テ委ク演説ス

第六章 核起腫 コイープ

此ハ皮色平然ノ時ノ如ク痛マスメ皮膜
ニ生スル小硬腫ヲ「コロツプ」腫ト名ク是諸

他ノ脂肪膜ニ発ル処ノ硬腫ト同法ニメ治
ナリ○此患ノ一箇ノ種美ハ多ク鉛青色
ニメ而メ膀胱形ナル唇(リツプ)コノープ医須クスクイ
鋏ヲ取テ割キ出スヘシ

外科書巻三終

Dit behoort Heer
Pasuinda

拝復早速御回答可申上之處学會ニ於テ他ノ俗
事ニて為遅延仕候段御寛恕奉祈候
外科必読 騰写中 其下巻之五（十九） 髖骨損傷
ニ至リ阮甫先生の註有之、
　此病傑迦児ノ扎素帯、効アリ云々
全篇ニ未タ嘗テ有らさる傑迦児の氏名ニ関シ夫ヽ
一考するに必読の原著者は或ハ此人ニ非さるかと想
像しそ近年 此想像を前年中上置れ事ニ被
存候而して此想像を深くせしめたるは若し此原著
が貴家ニ存せさるものとせは或ハ當時御勤務の蕃
書調所の蔵本なりしやも知るへからすと存したるに據
りを次て傑迦児の原書は近藤重蔵の好書故事
巻五十六、書籍三十六、蘭書四、医書の一部門中ニ見ゆ
る紅葉山文庫所蔵の
外科新編 三冊 有図 の項中ニ記する
ダービット、ハン、ゲッセル 著
ると想像せし次第ニ而て ゲッセルは即、
David von Gesscher 1736－1810.

關場用箋

を、アムステルダム大学の外科教授として有名なる外
科の大家なりしものにて其著は稍後の医史家
相調べ候に Neuburger u. Pagel, Hdb. d. Geschichte
III. pag. 116. –314 に於て唯其腫瘍論のみ
ありて外、他部には Debridement praeven-
tiv ハアムプタチオンと共に骨の治療上危険也と論
じたる條項も有之、此外科に関する著述の存せる
者なるを信ぜしめ候 又、上州の福田洪齋 高野長英
を隠庇したる医人の傳中 松尾香艸が近世名医傳の巻之中に傑氏兒十
巻を訳して瘍科雑䊓四巻を述ぶと有之、是亦、例
のゲッシエルなるべく、彼らはゲッシエルの著は當時
我邦に傳来したる事は明らかとなる 又、渡邊
華山の客坐掌記 全集巻二 中にゲッスル著切断法
あり、甲必丹ビユルゲルより文政書の項として あり
候
右より既に先生の記述も或はゲッセエルの著の
我邦に傳来し候に紅葉山文庫に蔵せられ、夫を訳
述せられしものに非ざるかを想像致し 又外科の原本

とし其他該文庫の十四種の蘭書（外科のみに関して）
中より見出し得候ハゞ プレンク、又ハイステル、
又ゴルテル如きと已に他の人より譯出せられたる
と一考せる時も想像に無理なる事となく
要せられ 紅葉山文庫中より該原書を
捜出して参考する他を亦と思ひ候ひて此点を
先輩に於て追々御事と御察候

◎紅葉山文庫所蔵の外科新編三冊、原名（ヘーデンタークセ、
ウーフヘネンデ、ヘールキュンデ 現代外科と可譯か）

第一巻 一七八二年刊行 我天明元年
第二巻 一七八三年〃 〃二年
第三巻 一七八六年〃 〃六年
アムステルダム、ヤンドルレ刊り

右相見候

右想像を記して及御尋候

猶、珍本外科宗伝、騰写又校勘中に有之大切に
謄写二ヶ月写許 恩借希望に候許御申上候

六月十日 再拝 不二彦

呉博士 研北

関場不二彦 關場・用箋